

---

# **俺の哀れで滑稽な楽しい日々**

熊取

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の哀れで滑稽な楽しい日々

### 【NNコード】

N6746D

### 【作者名】

熊取

### 【あらすじ】

この話しへとっても寂しがり屋な少年の誰かの心にあり続けようとした滑稽な物語

## 僕の心の溝の出来上がり（前書き）

この小説の彼とは清涼高校で新しい部活を立ち上げる人物です。

## 僕の心の溝の出来上がり

僕は異端、この世の異端、この世の摂理から外れた孤独で孤高の人間。

僕はようちえんのころから、いや、もつと前からだつたと思つ。とり分け聞き分けが良かつた。  
ゆえに周りの子たちと同じようではなかつた。

他の子たちがとくさつせんたいもののアニメでかたりかけてくる新の正義なる物にはまつてゐる時、僕はせいじかやぎいん、テレビのゲストがときおりかかるうその正義にきょうみをそられた。  
みんながすな場やゆうぐであそんでいる時、一人で本を読みながらそれをながめているのが好きだつた。

僕は一人がきらいじやなかつた。  
でも、いやじやないけど好きなわけでもない。  
けれど、あまり僕の周りに人はいなかつた。  
いつも母さんがいただけだ。

僕の父さんは自分のしゅぎはしんでもつらぬくといった頭のかたい人げんだつた。

昔から、どれだけ昔からかしらなかつたけど、父さんは自分のせいぎという物をまげるのは見たことがなかつた。

ゆえに、異端だつた。

母さんは、かなりのひねくれ者でひきょうな人げんだつた。

それに、さみしがり屋でもあった。

かなりのひねくれ者でランкиングでもあればせかいで100位ないには入れるんじゃないかつてぐらいひねくれていていつもかなりつっぱっていた。

ゆえに、異端だった。

だが、父はいそがしい人だった。  
なにせ動くはんいがせかいたんいだつたからだ。

そして、いつも母さんはかわいがり方というのがよく分からなかつたから、いつも僕をいじつてあそんでいた。

そうして9歳になった。

だが、彼の9年はあまつさえ長かつた。

この時、彼は人生のターニングポイントを迎えることになった。  
普通の日本人なら20を過ぎたころに迎える転機を、まだ一桁にも満たない歳にも関わらず、である。

この時、彼は学校では完全に浮いた存在になつていて、遂にずっと話しかけてくれていた子も離れて行つた　彼が怖くなつたのだ。  
いつも顔には冷淡な微笑みを浮かべ、自分たちとは別次元の考えを持つている・・・・・彼が。

でも、彼にはまだ両親が居たのだ。  
この存在は彼にとっては最後の綱、だった。

それは嵐の日の海に浮かぶ船の様な彼の心を地球に繫ぎ止めて置け

る唯一の物だつた。

た。でも、その綱はもう長い事繋がれていたみたいで随分脆くなつてい

彼から友という存在がなくなつたこの日遂に彼は両親から離れてしまつた。

その瞬間彼はこの世の唯一の支えを失くした。

そして、異端の中でもく異端になつた。

世界から、弾きだされてしまった。

今まではなんだかんだと言つても人が嫌いではなかつたのだが、この時ばかりは憎まずにはいられなかつたみたいだつた。

人でなく……この世を……。

この話は彼がこの世を憎み始めてから、高校生になつて新しい部活を立ち上げるまでの物語である。

## かのじゆくはんじや誕生ーー！

俺は家を出ようつと思つたが、今はまだ所詮経済力のない自分の過ち  
すら自分で対処できない唯の9歳児。だから、少し我慢することに  
した。

：一人で生きて行けるまで。

そして、1年が過ぎ10歳の誕生日を控えた日に俺は家を出た。

当てはあるようない様な感じだつた……。

だが、一年間死ぬ氣で自分を鍛え、経済の勉強もやつたし、今まで  
自分の小遣いなど使つた事もなかつたので金銭面でも多少は余裕が  
ある。

なにより、この一年間でもつとこの世を嫌いになつた。

この時は本氣で生きていけるという確信があつた。それが迷信等と  
は氣づけずに。

この後、俺の親はかなりの大騒ぎを起こしたらしい。

もちろんそのような事は俺が去つた後の事なので、知るよしも無か  
つたが……。

だけど、この世はそんなに甘くは無かつたといふことか。

もうびただけの時間が経つたのだらう。

僕はもう自分がどこにいるのかも分からなかつた。

外国のどこかの国を放浪していて、遂に金も尽きよつとしていた。

僕は日々の当たらぬ暗い所で座つていて、動く気力ももう無かつた。

そんな時にアイツは現れた。

『お前、こんなところ死ぬのかよ。』

そいつはいきなり俺にこんな質問を投げかけて來た。

俺はもうどうしようも無い位ボロボロだつたが、皮肉にも捻くれ者も母の血を引き継いでいるので、笑顔を作つて答えてやつた。

『ハハハッ、そんな訳ないだろ。結構日陰で休んでいただけだよ。  
俺にはやらなきやいけない大事があるんだから。死に場所は…  
…こんなところじゃない。そうだねこんなところじゃない。』

まさか声を掛けたやつも自分より何よりも背の低い子供がこんなことを直ぐに言い切るとは思つてなかつたらしくこの言葉も大変気に入つて、そして言つた。

『上出来、それに合格。さつきバツと見ただけだつたんだけじ唯者じやないとは思つて声を掛けたらこれだよ。よしつ、お前は俺と一緒に組織に入つて働く。うん、そうしよう。ちなみにお前に拒否する権利なんてないぞ。俺が直々に決めたんだからな。……俺の名は日本では光輝だ。輝いてるだろー。……宜しくな、俺のパートナ一。』

そう言つて、アイツは俺に握手を求めて來た。  
この時俺は何が何でも生きなければならなかつたので、…あいつの、

光輝の手を掴んだ。

こうして、明と言う名をもつ大人っぽい少年と光と言う名を持つ少  
し子供っぽい青年というこの世を少し騒がせる事になる名凸凹コン  
ビがここに誕生した。

## 俺の名前は【ジョーカー】

俺がアイツと出合った時には既に家を出てから1ヶ月以上が経つていたらしい。

だが、その間に十分見合ひほどの対価は得られた。

資金源を得たのだ。

こいつの誘いに乗ったのは死なない様にするためで、訳のわからん事に力を貸す気なんて毛頭なかつたのだが、組織の概要を聞いてその態度を150度改めた。

組織名は【エピゴノイ】ネーミングセンスの無い名前だな、と言つたらアイツは御免と言つたので多分この名前を付けたのはアイツだろつ。

ちなみに意味は「後継者」らしく何のだと問つたらポストモダンのと返された。

まず、この組織は結構様々な事業に手を出していて、その結果は全てを平均すると利益が出るといった成功しているのか失敗しているのか分からぬような現状だった。

あと、もう一つ組織の人も含めて他に知っている者は世界でも数十人位らしい別の活動もあつた。

それは戦争だつた。

戦争とは言つても目立たないよつにやつていて、仕掛けられた国も他の国に知られるのは得策ではなく、内争として処理をしている。この組織の戦績は7割位の黒星らしい。

ちなみに組織は国連加盟などしていないが、一つの独立した国となつてゐる。

テロ集団の総称を【クライシス】（危機）と呼んでいて、捻りがないと言つたら今度は顔を伏せてしまつた。

経済組織の方は米国や英國や日本まで結構な数の支部が存在しているのだが、クライシスの方は基本は本部について用事がある時のみ離れるらしい。

クライシスは大きく分けて戦闘部隊と頭脳部隊があり当然戦闘部隊の方が圧倒的な数がいる、とは言つてもこのクライシスの方は基本的に他国からの引き抜きにより成り立つてゐるのでそこまで大した数が存在している訳ではない。

そして、俺の自称相方は戦闘部隊の原則上から隊長、副隊長、隊長補佐、副隊長補佐此処までは1名ずつ部隊長4名、その下に各部隊9名ずつの空き有りの内の隊長という地位に経つてゐるという信じがたい事を言つてきた。

なんせ、こいつはまだ若干17歳だつたからだ。

他の人の年齢も随分若いらしいのだが、こいつの年はその中でも2番目である。

これもこいつが考えたらしいが、何か別名が欲しくて一晩考えた所トランプを思いついて隊長格はジャック、部隊長が順にスペードの10から4つ、その下は強い順に並ぶと言う事を思いつきそれをみんなに提案すると思いのほか呼びやすく、採用され皆からはジャックとも呼ばれているそうだ。

これを決める時ハートになつた人はいきなり反対し始めたらしい。

頭脳部隊にもこの呼び方が流行り、キングとクイーンの名前を貰つたこの時ちょうど人数が8名だった。

しかし、男子は5名でこちらの方が不名誉な称号となつた。

そして、俺の配属について問うとあいつはかなり突拍子もない事のたまつた。

「ああ、お前はトップだ。これから最近では違う方向に進みだした2つの部隊を纏めてもらひ。

これからお前は

【ジョーカー】だ。

……お前には期待してるぜ。」

此処からこの物語は少しづつ始まつていぐ。

「…………お前、何だつて？」

俺はジョーカー？

そこはあまり問題じゃないが、トップ？  
つまり一番偉い存在ってことか。

嘘だろ、別に気に入らないとかじゃないけど。・・・・・俺はまだ年齢が一桁になつたばかりの正真正銘だだかなり変わつてるので生意氣なガキだぞ。

「だから、お前が俺らを纏めるの、安心しろ。幾等他の奴がお前のこと嫌つてもお前が命令すれば皆嫌々ながらでも従つてくれる。」  
やつぱり俺がトップなのか。それに皆つて……。

「そうか、コイツがいくらこきがつても皆が反対すれば、

「それはもう皆と話し合つて決まつた事なのか？」

「そうだよ、こんな糞餓鬼がいくら騒いだとこりで、

「ああ、戦闘部隊はまず俺が言つならつて事で全員従つてくれたぜ。  
一応俺のクラスはジャックだからな。

だけど、頭脳部隊を説得するのに困つたな。

俺はあいつ等にあまり好かれてなかつたから。けど、1年経つて使えないようなら捨てるって事で了承してくれた。だから、一年以内にちゃんと出来るようにしてくれよな。」

話しがちと出来すぎな気がするんだが、  
「何でお前そこまで俺に期待してんだ。少し可笑しいだろ。どつか  
であつたことでもあるのか？」

すると、やつは笑いだした。

「フフフッ……勘弁な行き成り笑つたりして。お前が俺の想像通りに鋭いもんだから思わず笑つちまつた。えーーっと、……そうだ、お前にどつかで会つたかつてことだよな。あるぜ、と言うかずっと見てた。いつからだつけかな。もうかれこれ2・3年位たつと思つけどな。一目みてピーンときて、暇になつたら偶に来てたんだ。でも、3日前にお前が死にかけてるのを見た時は吃驚したなー。何せお前俺らが敵戦地から帰る途中の場所にくたばつてるんだもんな。そのくせあの態度だる。戦闘部隊が納得したのは俺が前からお前の事を話してた部分が大きいんだ。だからあいつ等は納得して頭脳連中は反対したんだよ。」

「そうか、そうだつたのか。

それに、俺はどんなところにいたんだよ。

あの時はもうかなり意識が朦朧としてたからな……3日? こいつ確かに3日つて言つたよな。

「おい、俺は3日も寝てたのか?」

「お前にしては少し反応遅かったな。ああ、確かに寝てたよ。あとお前が気絶してからずーーーーっと、それこそ嘘見てーに眠つてたな。だけどお前もタイミングよく起きるよな。お前の待遇が決まって俺がお前の様子を見にきて物の数分で目覚めたんだぞ。」

「お前は地球のどこいら辺に位置してるんだ。」  
「まじで眠つてたのか。それにここ何処だよ。ずっと眠つてたから分からんんだが。」

「確かに……ヨーロッパ? すまん他の人に聞いてくれ。俺、

教養あまりなくて。」「

どひまで馬鹿なんだよここつは。

ホントに何十つて部下を抱えてんのか?

はあつ、こいつの話しどひまで信用していいのか知らねえが、：

今は時間を無駄にしてる場合じやあないよな。

「俺はお前をこれから句と呼べばいい。」

「句でもいいよん。」「

「そうか、分かつた光輝。

じやあ俺の事は今度からはジョーカーと呼べ。

この名前、思いのほか気にいった。

そんで今はこんなところでいつまでもしゃべってる場合じやあ無い。  
早いところ出来るよひこにならなきゃなんねえからな、そうしなきゃ俺  
は捨てられる。

取り合えず8ヶ円もあればマスターしてやるわ。」

「お前普通はそこで半年とかにしないか?」

「人間の一度に詰め込める知識量を過小評価するな。」

そう言つて俺はかなり高級そうなベッドから起きて立ち上がると無  
言でクローゼットを開けて中から俺にぴったり合ひそうなサイズの  
スーツを取り出して着替えた。

そして、この西洋風の高級の部屋からドアを開けて一歩外に出て、  
光輝も出てからドアを閉めた。

「ひ、ひ、ひ」と笑つて指示をだす。

「取り合はずキングから10までの全員にあつてみたいんだが、ダメか？」

「つーーん、取り合はず今の所は戦闘部隊で会えるのは俺の部下の10だけだぞ。頭脳部隊は多分5名にはあると思つけど、皆変わりもんだぜ。

ま、それは全員に言えることだけだな。」

それだけ会えれば今のとこ十分だ。

あまり一辺にあつても頭がこんがらがりそつだからな。

「じゃあ、そこに案内してくれ。光輝。」

「へい、了解。」

ハハハッ、これからは忙しくなりそうだな。

俺の初勝利（前書き）

## 俺の初勝利

まず、俺は1-0に会うことにした。

1-0の居る場所はさつきまで俺が氣絶していた洋館とは別の訓練場なるところでいつも鍛錬を積んでいるらしいのでそこに向かって歩いて来て、今その訓練場に足を踏み入れたところである。

中に入ると二人の男がバトルをしていた。

と言うより一人の30代後半に見えるがつしりとした黒人の男が10代ぐらいの白人の青年で遊んでいる様な感じだった。

「光輝、あの一人は誰だ。階級と名前と年齢を教えてくれ。」

光輝は順に指を指しながら答えた。

「余裕で相手の攻撃をかわしている方がクローバーの1-0のアレクで確か年は30後半ぐらいだつたと思うけど良く覚えてない。で、必死にずっと攻撃を繰り出している方が3日前までここの中年少だつた14歳のエディでまだあいつは入つて半年も経つてないから弱くて階級は2だぞ。」

あれで2番目の弱さなのかよ。

本当にこいつら人間か？

目の前の光景はさしもの少年も驚いた。

少年から見たら二人の動きは普通の人間のそれとは思えない物で、2ランクと呼ばれる少年の攻撃でさえボクシングの大会になぞでれ

ば、前ラウンド一撃K-Oができる間に見える。

「あいつら人間なのかよ。」

こんな言葉が漏れて出た。

すると、あいつはハハッと笑つて答えた。

「一般人からみたらそう見えるらしいな。ナゼやう言つてるやつも何年かすればあの位は動ける様になつたぞ。」

もう人間のそれじゃないね、あいつ等は何時までも見てる暇は無いな。

「おー！…少し止めてくれ…！」

すると、二人は直ぐに止めて20メートル程の距離があつたにも関わらず一瞬で間を詰めて来た。

「今日は挨拶に来ただけだ。俺の事はこれからジョーカーと呼ぶよつて、お前達の紹介は要らないから。これからよろしく頼むよ。」

アレクと言つおつさんの方は分かりましたと素直に答えたがエディの方は何か氣に入らない様子で口を尖らせて厭味を呴いた。

「……ふん、こんな俺より弱そうな餓鬼が…何で全く…。」

当然この言葉は全員に聞こえて、アレクのおつさんは良い顔はしてなかつた。

少し間違いがあるね。弱そりゃなくて、弱いだ。強さで競つたら絶対に俺は勝てない自信があるね。

「クツクツクツ、俺を歓迎してくれない奴もいるみたいだな。別に良いんだけどな、どんな反応してくれても俺一人ではお前を此処から叩き出す権限なんてないし、皆が納得してくれるとも思えん。ましてや説得なんてしてゐ間に俺が叩き出されても洒落にならんからな。」

「何だと。」

エディが案の定囁み付いて来て今までより一層笑顔になる。

「シシシシ、俺の言いたい事が伝わらなかつたか？じゃあお前の頭でも分かるよ。端的に言い換えてやるよ。……俺はお前が嫌いだ。」

「

その瞬間に襲いかかる。アレクに服をがつしりと持たれているのでそれは出来なかつた。

「このままだとお前にも俺にも不満が残るだろ。……そこでだ、どっちが強いかはっきりと決めよ。この戦いにルールを求めちゃいけないよ。それじゃ、お前のタイミングで始めよ。」

直ぐには襲いかからなかつたが、アレクの力が微妙に少し、一瞬緩んだ隙を図つて腕を弾いて、次に相手の方を見ると彼は笑っていた。このどう考へても自分が不利だという状況で彼はずつと笑つてゐる。

「まあ少しだけ待てよ。名前ぐらい教えてくれ。」

この言葉を聞いて少しエディは拍子抜けしたみたいだが、名前ぐらいならと思って一メートルぐらい前で立ち止まつた。これが罷だとも知らずに。

「そりいえばまだ言つてなかつたな。よーく聞いとけ俺はなあ、グ  
フォツ！！」

この喋るのに気を取られる瞬間を彼は狙つていた。

誰でも心の奥底で意識しなくとも自然に喋る言葉を自分の中で整理してから大抵の場合話す。

その一つの隙を付いて彼はいくら超人といえども鍛えることは出来ていないのであるう急所を狙つて蹴りを全力で喰らわした。

この行動にはその場にいた一人を除く全員（他にも修行している人がいて、この戦いを見ようと休憩を取つて見ていた人もいる）が言葉も出ないほど呆気にとられ、その中の半数以上が自分の物も触りながらエディに同情を寄せた。

エディは何か言いたそうだが、うまく呂律が回らなくなつてているのだが、どうやら言いたい事は伝わつてゐるようである。

「ケケケツ、卑怯だつて。別に俺はルールを破つちやいないぜ。攻撃した場所はどうかつて、そんなものは知らん。俺は言つただろ。これは戦いだ、つて。そりやあ試合であんなとこを攻撃しようとは思つてもやらんが、これは生憎そうじやない。喧嘩と一緒に、勝つ事それが前提でなんのルールもない。いや、一つだけあつたけどそれも俺はちゃんと守つた。・・・・こんなことも分らないのかよ、それはお前のタイミングで始まる事だ。だからお前には俺に勝つチャンスが存在していたんだ。それにも関わらずお前は今無様にもそこでのた打ち回つてゐる。

お前は俺の倍以上の身体能力が備わつてゐるにも関わらずにお前はそれをミクロン程も使いこなせてはいない。年下相手になら勝てると思ったか？残念だつたな。これで分かつたか？自覚したか？お前

は俺より弱いんだよ。

でも、今回の戦いでお前はかなりの代償と共にまた少しこの世を知  
れて成長したことだらう。これからも精進してくれ。じゃあ、俺は  
次があるから、いくぞ光輝。」

そして、まだまだエディは納得していない様子だったが、そんなこ  
とは気持ちの端に掛かつても全く無視して次の目的地に歩いて去つ  
て行つた。

「…………フフフッ、気にいつちやつた。」

この後、彼は一度寒気を感じて身震いしたらしい。

西北の後かいですか？（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

面おもての後まぢですか？

「いいだぞ。」

「やうか、……つてふざけるなよお前。ここに来るまで何分掛かってるんだ。

あれが、この距離間はもしかして内部で二つに分かれてる頭脳と戦闘の距離をそのまま表してるからじゃねえだろうな。だとしたら本当にヤバイな。どんだけ距離離れてるんだよ。」

ホントにヤバイな俺。一年後に此処に居ないかも知れねえ。

「オーライト、あつたりー。いやー昔めつちや言って命いしたことあつてな。それから場所はなしやがってな。今じや、田的だけ共有してるだけで別の組織なんだよね。」

やつぱりか。んつん……はあ、ここまでとはね。

取り合えず会つてみるか。

謎の研究所の中はまず最初に無駄に画面がでかいパソコンが一台あり、そのキーボードをすごい速さで叩いている男がいるので、取り合えず後ろまで行つて様子を見ることにした。

「……クラッカーか。」

俺がぼそつと呟いただけなのに凄い勢いで椅子を回転させてこじちらを見てきた。

「君、分かるのかい？」

初めて正面から見たが、凄いな。特にもつさもさの髪が。これは後で奇麗に切つてもらおう。

「ええまあ。俺の師に【ブレークキング】とか少し恥ずかしい称号の人気がいてその人に無理やり教えられましたから。それと俺の事はジョーカーと呼べ。」

【ブレークキング】とは世界でも1・2を争うほど凄腕クラッカーの一人でその道の専門家で知らない人はいないという程有名なのが、当然その道でない人は知らないので彼は有名人だとは全く知らなかつた。

「ああ、今度は少し技術を教えてくれ。」

世界ランク6位か。あいつは使える。というかちやんの戦闘部隊の動きの時も思つたが、ここにはちゃんと人材はそろつてゐる。ちゃんと使ってやれる奴が居ない気はするけどな。

ま、えてして達人は皆変人つてのが定説だから纏めるのが難しいんだとは思うけど。

今度は……銃とか弄つてるから武器工か。しかも後ろの棚に半端じゃない程銃が置いてあるもんな。

で、その隣の人は……おいおい、あれって洗濯機だよな。見間違いやないよな。え、なんでこんな変人たちの中で、まあ洗濯機作るのは普通じやないけどなんでありふれたもん作つてるんだ。あ、そうか。あの洗濯機にはすさまじい機能が……

「ちなみにあの洗濯機はいたつて普通の機能しかないぞ。」

まじでかよ。あと、お前読心術でも使えるのか？  
それはないな。恐らく俺が動搖したせいだろう。

落ち着け。こんことで動搖していたら何が起きるか分からんぞ。

……よし、落ち着いた。

「マカロフ……いや、トカレフの方かな安全装置がないからな。でもこれを戦場で使えないだる。誰かの護身用にでもするのか？」

今度は二つを振り返つてさらに握手をされた。  
あ、今度は女の子だ。なかなか可愛くてしかもちつちやいな。  
俺よりちつちやいじやねえか。

「やつと話しの分かる人が現れてくれました。」  
また個性あるひとだな。

それに銃の会話が出来ないつて戦闘部隊の人丈夫か？  
あー、頭痛くなってきた。

「俺はジョーカーって呼んで。で、そちらの人とお前は。  
もう自己紹介飽きた。」

それにアレクさんは覚えてるんだけどもう一人誰だったつけ？

「私はスミスって呼んでね。こつちは皆ハートの一つだから心つて  
呼ばれてる。」

それに心は片腕だけ上げて答えた。

「名前まで銃か。お前どれだけ好きなんだ？」

「お前さつきの事といいなんでそんなこと知つてんだ？」

光輝が少し不審な目で見て来た。何度も彼に会いに来ていたとは言つてもこの様な一面を目にしたことはなかつたからだ。

この一年間碌な人に出会わなかつたからだ。

「そんな事はどうでもいいだろ。もう一様の挨拶は済んだんだ。さつさと次行くぞ。」

光輝はその後もずっとブツブツ言つていたので、黙らせてやりたかったが、ことごとく失敗したので諦めた。

絶対いつか武断政治してやる。

次に辿り着いたのは今までで一番怪しそ満天の部屋だった。

「……ここは何なんだ？」

「ここはな、ドカン！！ 科学研究室みたいなものだ。」

田の前の「じ」い扉の中がどうなつてゐるのかは分からないが、扉の端からは煙が漏れ出していく、中から「ボコボコ」と「ドカン」という爆発音などが聞こえてくる。

「「」の中は安全なのか？」

「まず酸素量ちゃんと21パーセントあるのか？  
ガスマスクとかいるんじゃねえのか？」

「よし、お前が先にこの中に入れ。上司の命令だ。」

「いや、「」の中はいつたらヤバいと思つんだけど。流石に俺が幾ら馬鹿でもそれ位は分かるぞ。まず此處は田「」から誰も近づかないこと」「いいから入れ。」

俺は「」のままでは埒があかないと思つたので、扉を開けると光輝を放り込み急いで扉を閉めた。

10秒位はずつと扉を叩いたり蹴つたりしている音が聞こえたが、ごつごつだけあってビクともしなく諦めたのか何が起きたのか知らないが全ての音が止んで、また10秒経つてから光輝の悲鳴が聞こえ、それから何の音沙汰もなく3分が過ぎた。

中からは凄まじい音が聞こえるだけだ。

……気になるな。一瞬だけ開けてまた閉めるか。

「ゴゴッ、ビュン、バタン！！

俺が開けて閉める前に何かが飛び出してきた。

その何かは何か分かるんだが、なんて言つたらいいか分からない。

だけど取り合えず…

「済まなかつた。」

「済まなかつた、で済むと思うかてめえ！！まず何か悪いもん吸い込んで手足が痺れてきて何かいろんな動物の部分が組み合わされる奴が首輪噛み碎いて襲いかかってきて、奥から不気味な笑い声が聞こえてきて嫌いな花が周りに広がつてその前に川が見えて昔戦場で別れたはずの上司がいてつ…………とにかく死ぬかと思ったんだぞ！！」

ふう、入らなくて良かつた。此処で何してるんだ中の人。

別に知りたくないけどな。

「光輝、此処の人の役職は何なんだ？」

「お前無視か？

俺が死にかけたのを流すつもりか？

お前もこの中に入つてみるか？

そうすれば俺の伝えたい事が完全に伝わると思うぞ？」

「ホントにごめん。絶対止めてくれまだ死にたくないから。」

入らなくても分かるよ。取り合えずこの中に入つたら生きて帰つてこれない事くらい。

「許したくはないがお前の口調が変わるぐらいだから妥協してやろう。

で、こいつが何してるかだつたな。こいつは医師だ。昔はかなり有名な所にいたらしが、かなり厄介な趣味を持っていたからだけ者にされて、何かヤバい事件をおこして免許も剥奪されて途方に暮れていたのをここで引き取つたんだよ。要するにこいつは社会不適合者つてことだ。」

…………「マイツ等、もしかして全員そつなのか?

「そうか、此処は覚悟ができた時にまつ一度出直すことにして、次で最後なんだる。早く案内してくれ。」

「ああ、次は……クイーンだ。」

ああ、あの男なのに女王であるクイーンの称号を『えられた奴か。

楽しみだな。

最後に訪れた場所にいたのは何とも可愛らしい顔をした人がいた。

「女顔っぽいんじゃなくて、おかまに似た顔をしてるな。」

「それは絶対本人には言わん方が良いぞ。」

分かってる。本人に言つたら冗談抜きで死ぬかもしれんからな。

光輝が言うにはもう軽い人間不信に落ちているらしく、もう目の前でいじり続けているロボットだけが友だと言つているらしい。

依存症どこの話しではないな、それは。

それにしてもここまで来ると狙つてこういう人材を集めるとしか思えん。

この中に自分が含まれているのが何とも言い難い屈辱だけだな。でも、俺はあのメンバーの中では対して目立ちはしないと思つんだけどな。

「ここにちは、新しく此処に入ったジョーカーです。」

「…………。」

だんまりですか。さて、どうしようか。まず、こっちを向かせるか。

「こっちを向いてくれませんか？クイーンさん。」

この名前は何度も聞かされているので、かなりの反応を見せた。

まず、スパナとボルトを床に落とし、周りに纏っていた負のオーラが大きくなってしまった。

このまま放置しておいたら冗談抜きで本当に死んじゃうかもな。

「無視は良くないですよ。それに今のは貴方をどう呼べば良いか分からなかつたからです。どう呼んだら宜しいんですか? ちなみに俺の事はジョーカーと呼んで下さい。」

今、クイーンは体育座りに指を口の所に当てている状態でこつちを見つめている。

そんなにウジウジとしてたらイライラしてくるな。早く何か喋れや。

「……俺、……名前、無い……。」

名前が無い? 皆この国に来ると名前を変えるんだろう。なんとなくそんな気がする。

「じゃあ今度からお前は……そつだな、タロスだ。意味は分かるか? 分からんのなら後で調べとけ。」

アイツはぶつぶつと自分の名前を呟いている。  
気に入ればいいけどな。

「光輝、帰るぞ。」

今回の訪問は得るものが多くつたな。

それに、これは一年間ホントに忙しくなりそつだな。

ここにいる誰もがこの一年間の彼の働きは目の当たりにして來てい

一年後

ある国のあるビルの上で重役会議が開かれていて、それもいよいよ大詰めに入っていた。

「そして、彼の事は採用という方針でいいんですね。  
だれも反対する者などいるはずもなかつた。

て、不気味ではあるが彼を手放した時の代償を考えるとそこには田を暝るしかないのである。

彼がきてからは経済面でも急成長をとげ、軍隊の方は世界侵略率が2%まで引きあがつており、最近では進行速度も上がっており、もう一年も経てば8%までは達するとさえ言われている。

「彼の任期はこれから3年後まで続きます。これで最後になりますが、本当にいいんですね。」

「では、これから我等のトップはジョーカーに決まりました。これにて重役会議を終わりにします。」

彼の世界の改革はまだ始まつたばかりである。

## 2章 戦場の少女（前書き）

AとBは時間の軸が一年程ずれています。

## 2章 戦場の少女

ある日戦場で一人の女の子が生まれた。

そして、その子の親は戦場から逃げだした。

だが、その国はその様な行為を許しはしなかった。

すぐに追ってはやつてきて必死に逃げて逃げて時には鬪いまた逃げて、そうして幾つかの年月を越え身も心も芯から疲れ果て、遂に捉つてしまつた。

無情にも少女と供に戦場へ送り込まれた。

生き残る為に一心不乱に戦つたが、それでも戦況不利に進み続け敵の集団に追い詰められた。

「私達は構わない。でも、この子だけは。」

親は武器を捨て、少女を背の後ろにやり相手に頼み込んだ。

周りの者はざわめき一いつに分かれた。殺せといふ者助けて上げようと言つ者。

だが、その中から現れ躊躇なく二人の親を撃ち殺した者が出了た。

そのものは背は低く、漆黒のマントで全身を包み頭には何を思った

かきつねの面をつけ不敵に笑っていた。

そして、絶命寸前の虫の息でボロボロの体の2人を見下ろせる程まで近づいて肩を抱き、震える子供を見し、声を出した。

「お前らの願いは受け入れた。親切としてこの子の世話を見てあげましょ。……安らかに眠れ。」

親は最後に子供に笑顔を見せ、息を引き取った。

子供は涙を流しながら、仮面の少年に睨みを利かせた。

親の死に際に涙をながし、親を追い詰めた母国を恨み、こんな目に逢わなければならなかつた数奇な運命に不条理を覚え、戦争を作り、親を追い詰め、あざ笑うかのような顔を見せ見下しながら視線を向けた少年に怒りを感じた。

普通に暮らしたかつただけなのに、わずかな幸せで良かつたのに……。

そうか……君の涙は怒りなんだね。

美しいね……ああ、美しいよ。今空に瞬いているどの星々よりも君の涙をいつくしく感じてしまつ。

その瞳の向かう方に僕はいつまでもあり続ける様に……。

それから数年が経つた。

「むむむ、嫌な夢を見ました。……この夢を見たって事は殺しに行かなくちゃあなりませんね。」

彼女の名はエレナ、世界征服を企む悪の国の住人

そんな彼女が大きなお城の中で田を覚ました。

「今日こそは殺つてやります。」

まだ、日が顔を出したばかりの夜と朝の境界の時間に静かに部屋を抜けに行つた。

「バン！」

「覚悟し……ろつ。」

ドアを開けて勢いよく少女が部屋に入ろうとしたが部屋に一步踏み入れた直後、上から網が降つてきた。

「なんのつ、これしき。」

横に跳躍してかわし、次に目の前から数十もの刃が飛んでくる。

「はつ……」

ガキキキキイイン、

腰のベルトにつけられた鞘から柄がなく、細身の白い短剣を取り出しあてて弾く。

彼女のとり出した剣はこの城専属の変態武器製造者の師匠が世に残した10本の刀内の「一振りで名を『白刃』しらのき」と言い、その切れ味は熟練の者なら鉄でさえも両断し、軽さも短剣であるので申し分ないのだが、リーチが欠点であり、使おうとする者がいなかつた一品で彼女が目を付けるまで埃を被るほど眠つっていたといふか、忘れ去られていた。

「御命貰つた……」

一瞬でベットまで走り、膨らみのある所に短剣を刺す。

「手応えが……」

ドゥン、キイイン

「残念でした。俺は後ろだよ。」

銃を片手にドアに体を傾けて口を吊り上げて不敵な笑みを少年は向けていた。

「フフフッ、まだまだ精進が足りんな。俺を倒すには3か月早かつたようだぜ。」

「三か月ついて、もう直ぐそこじゃないですか。」

「当たり前だ。お前の親は戦場では有名な化け物だったんだぞ。その血を引いているお前も当然のことながら化け物なのだ。人間が頑張つてどうにかなる境地である達人クラスに俺はもうなってるんだ、お前ら見たいに超人になれる奴らと一緒に考えようと言つのがそもそもの間違えであつてだな。」

しかももう俺は不意を突かなければ延命出来んほどだぞ。絶対ここに住んでいる奴らは俺の弱さを見くびっているよな。

「フフッ、分かりました。……三ヶ月後までに覚悟してなさい。」

ふつ、甘いな。この城には限られた奴しか知らない逃げ道があるんだよ。それにかくれんぼは俺の十八番だぜ。三ヶ月たつたら戦つてやんないよ。

「それにしても、どうしてここにくることが分かつたですか？ちゃんと殺氣はもちろん気配も殺して監視カメラにも気をつけたのに。」

「ん、それはな。お前の部屋のプライバシーを俺が持つていてるからだ。例えばだな……嫌な夢を見ました、とかな。」

あら、何か下を向いて震えだしたぞ。はてな……あ、しまったかも。  
……逃げよう。

「……待ちな。お前の命は此処で終わらじてやう。」

ヤバい。……死んだかもしれん。

今日も暗殺は失敗に終わってしまった。

初めの内は今よりずっと簡単にボロボロになるまでやられていた。

あの人はかなりのサドで女の子にもお構いなしで、私が出会って來た同年の男の子は本気で殴ってきた事なんて一度もなかつたのでめちゃめちゃ痛かつた。実は彼と私は同じ年らしい。

来る日も来る日も襲いかかってはやられるのを繰り返していた。その内見かねた戦闘部に入っていた女性の人人が先頭しなんをしてくれた。

この時は全然知らなかつたけど、見かねたのは確かだけど鍛えるようこいつのは彼だつたらしい。

彼は今でも憎いし許したくはないけど、私は今の暮らしが親と一緒に逃避行していた時以上に気に入つてしまつていて。

皆と笑つて時には泣いて、ちょっと変わつた世界だけど何よりも望んでいた幸せを見てくれた彼に今は素直に感謝してしたりもしている。

そして、歯車は回り出す。

押せば外れてしまつよいつな歯車だけど、今日も今日とて回つていた。

## 囚われの御姫様 ファースト（前書き）

永らく更新できなくて済みませんでした。

また何時になることか知れませんが・・・。

## 囚われの御姫様 ファースト

私は昔からお城の外を眺めることしかできずについた。

お城の外は危ないからと教えられて、ずっとお城で暮らしてきて、でも興味はあつたし何度も何度も外へ出たいと思い何度も夢見たことがある。

でも、今は何時でも出て行ける。

彼が出してくれたから……。

### 囚われの御姫様

ある晴れた晴天の下で彼は数人を集めて訳を直ぐに把握するには容易では無い事を言い出した。

「結婚式に招待されたから行ってくる、お前等同行してくれ。」

「」「」「へ?」「」「」

この場に呼び出されたのは全部で四人でまずは光輝、アレクにエティ、ヒレナである。

「面白そうだな、うまいもんも食えるんだろ?」

「ああ、いつぱいあるや。」

「おじおじ、他にあるだろ聞く」と。

「そうそう、そんな直ぐ言われたつて着るものどうするのよ。」

「心配するな、ドレスを数着買ってある。結構盛大な結婚式だから良いものを用意してある。」

「そうなの、良かつた。」

「それも違うだろ。」

「ああ、お前の言う通りだな。警備は4人で足りるのか?それに2人はまだ半人前だぞ。」

「それも多分大丈夫だ。その警備は万全だからな。」

「そこもやはりぬかりはないか。」

「隊長も一番まともな事言つてますけど少ししずれていますよ。」

この組織の中では一番と呼んでいい程のまともな精神の持ち主であるH'テイはいまや完全な突つ込み要因である。

「取り敢えず予定話すぞ。」

結婚式自体は三日後だ。だが、さつきも言つたが盛大に行はらしくてな一日後には披露宴が行われる。明日には現地についておくつもりだから今から準備して来てくれ、一時間もあれば済むだろ。じゃあ、外に集合だから解散してくれ。」

皆は直ぐに部屋を後にした。

「あいつは何を企んでるんだろ。」

部屋の外にでてすぐにエディがポツリと零した。

「 さあ知らねえし特に興味ねえな。今はどんな料理が出るのか楽し  
みで頭いっぱいだぜ。 」

光輝は食いつきぱりかりである。

「 私もそんなに気にはならないわね。 てか、気にしたら負けな気が  
してるし。 絶対時が来たら話すとか言って教えてくれないだろうし  
ね。 」

案外エレナは普通に答えた。

最後に隊長の意見の番となつて皆眼だけを向ける。

「 まあジョーカーの事だ。 何か考えがあつてのことなんだろう。 あ  
いつはいつも掴めない感じだからいまきにしても仕方がないだろ  
う。俺は言われたことをやる、 それだけだ。 」

言われたことをやる、 とは固を持つていよいよあるがそれ自体  
も確固とした意見であり考え方である。だから、 そんな隊長をエディ  
や他の隊員達は目指してついて行くのであり今彼が考えるなど言わ  
れた彼はこれ以上の詮索を止めた。

「 こいつの間にこんなにたくさん服を部屋に運んだのよ。 」

彼女が部屋のドアを開けると数十着の服と大きな鏡が堂々と並べら  
れており、 服を見てみようと近付いてみると紙が置かれていた。

『 1Jの中から一着を選んでハンガーに書いてある番号を此処に書い

ておけ。手に取るのもよし着るのも切るのも自由にしていいが、早くこりよ。』

早くしみつて言われても、……全部試着してみたいし。

徐に何とも無しに紙の裏も見てみるとそこにも文字があった。

『P・S 日本には【馬子】にも【衣装】と云ふ諺もあるのだ。慎重に選べ。』

違う国の言葉が入っていて読めない所もあったが、後で光輝にでも聞ひうと流すことにしてポケットにしまい服を手に取った。

「うへん、これも捨てがたいわね。」

早く済まさうとは分かつていてもそれは女の子な訳でかなり服を着てかなり悩んでいた。

「やつぱり……これかな。」

「俺もそれが一番いいと思ひや。」

「そうね、……うん一着田はこれにして一着田は……」

「三番目に着た奴なんてどうだ。」

「うん、あれは……」

ジャキッ

愛刀を彼の後ろから喉元に突き付ける。

そこまでの動作は彼に何もさせない程の完璧な動きだった。

「お前、そんな動きが出来たんだな。凄い成長だぞ、嬉しいぜ。ところで、いくら女の子に密着されているとはいえども刃物突き付けられてたらドキドキはするけど嬉しい方じゃないんですが、それにその顔めちゃめちゃ怖いんですけど。」

彼女は満面の笑みを浮かべていた。

「ふふふふ、怖いですって御冗談を。何時からいらしてたんですか？」

彼女の笑顔見るのひつさしふりだなー。クリアするのがものすっげえハイリスクだけどな。

「今来たばかりですよー、覗きなんて犯罪行為を俺がやるなら大膽かつ纖細になんてやり方時によつてはするかもだけど普通はやらな痛つてー、一皮切れてるぞ血がでてるから、それにジョークだよ。

」

まだ見ぬ神よ、今この場この一瞬だけ信じます。どうか俺に打開策を下さい。彼女、何を言つても聞かないどころかどんどんオーラが噴き出でています。

そして、ドアが開き誰かが入ってきた。

「…ツ……どうしたんですか！？」

入ってきたのは婦長のミハネさんで若いのに他にも料理や掃除、洗

濯とにかくいろいろなことができるスーパーな人で今年になつて漢字の画数が三画になる一つ手前まできて相当焦つてきているみたいだが、このことは絶対のタブーとなつてゐる。

「今、とんでもない程までの礼の失つたことを考えたり何かしてくれやがりませんでしたか？」

彼に料理人の命を向けながら尋ねた。

「いえいえ、誤解ですよ。考へていたのは精々お綺麗だなつて位です。」

「ところでなんでそんな状態なんですか？」  
さつきまでとは打つて変わつた声である。

「それはですね「覗かれました。」

「エレナちゃん首を撥ねて一撃絶命なんてダメよ。ちゃんと シスター ボールでも捕まえれる位まで弱らせてからじやないと。」

「それもそうですね。軽率でした。」

エレナは彼に突き付けていた刀を鞘に収めてミハネさんの所にいった。

彼は浴びていたオーラから解放されたことにより抜け出しついた緊張によりへなへなと床に座り込んでしまつた。

かみいいいい！－くそつ、そつだつたな。お前は俺が嫌いだつたんだつたよな。

お前に頼んだ俺が愚かだつたぜ。もういい、お前の助けなど期待はするが当てにはしない。自分の力で生き残つてやる。

あの一人はドアの近くに立るのでドアからの脱出は無理っぽそうだな。となるとやつぱり三階とはいえども…………恋しかねえんだけどエレナさん腕を掴まれました。

「いやですねえ、何処に行くんですか?」これからが戻ことじるなんでしょう。」「

彼らは俺の帰りを信じて一生待つてくれるだらうか?あの日あの時約束を交わした誓いの地で……[冗談はほどほどだな。

「お前が時間に遅刻するなんて珍しい事もあるんだな。ところで何であいつはあんなに機嫌がいいんだ?あんなに笑顔のはかなりレアだぜ。」「

「彼女の笑顔を見るのはたいへんだったよ。そのためにはまず誰かが不幸せにならなきゃあならないからな。それよりも時間だからもう出ぬぞ。へりに乗れ。」「

皆が搭乗した。運転するのは隊長である。

「エディ、俺が到着するまで冗談の大切さと危険性を教えてやるつ。

」

## 囚われの御姫様 セーランド

私は只の人形に過ぎなかつた。

あのお城では何もする事がなかつた。

広い空を眺める事も、地を蹴る事も、人と話しをする事、そして笑うことさえも叶わなかつた。願うことすらできはしなかつた。  
そこに自由はなかつた。

それがどんなに悲しい事なのかを知る事が出来たのも彼のおかげだつたのだ。

「牢獄に閉ざされた少女の心」

「これより、披露宴を執り行います！…」

司会の男が会場いっぱいに響き渡る程の声で叫んだ。

「なあ、なあ、もう飯食つてもいいかな。俺つまそくな物見てたら  
急に腹減つてきちゃつたんだよ。」

「駄目に決まつてゐるでしょ。全く、もつと年上うしろちやんとして  
よ、注目浴びるでしょうが！…」

「2人ともお願ひだから静かにしてよ。（それに注目なら最初から

ずっと受けてるからね。」

会場の端で行われているこの会話は周りの人達からしたらかなり遜色があるようだ。

他より年も若いといふこともあってその感じは一層強く注目の的であり、そんじょそこいらの人なら叩き出されている所であるだらう。

だが、それは叶わぬのだ。どれだけ彼等にストレスを感じても彼のお供の者となると簡単には行かなくなる。

「なんだか皆さん済みませんね。あの者達にもこうこう場を経験させてみよつと思い連れて來たのですが、なんだか粗相のない様で。彼らには明日はこの様なことのないよう言つておきますので。」「いえいえ、構いませんよ。貴方が来てくれただけで十分なのですから。」

「やう言つてもうえると有りがたいです。」

確かに普段彼はこのような場に招待こそされるもの行きはしないので、それ故に彼と直接会つて話す機会など滅多に来ず、それだけで価値があるのだ。

「ところで、クロロ氏はどうしていらっしゃるのでしょうか？一言挨拶をしておきたいのですが。」

「彼ですか？今は裏に控えさせています。呼びますか？」

「ええ、お願ひします。」

彼と会話していた年配の少し腹の垂れて來ていた男は近くのウエイターに話しかけると一分としないうちに呼ばれた男がやつてきた。

「お久しぶりです、ジョーカー殿。」「

「ああ、久しいね。クロロさん。」

ジョーカーとクロロは握手を交わしながら言った。

「では、貴方達もそう暇ではないでしょ。から僕は彼らを宥めてきます。」

「できればまたお会いしたいですね。」

「ええ、近いうちに。」

仮面のしたの彼の顔は、機嫌そうに笑みでいっぱいだった。

「おい、お前ら。騒いでないでちゃんと花嫁の方も見ておけよ。」

「わあ、ばばつであるよ。」

「口にもの含んで喋らないでよ。」

「お前ら少し静かにしていろ。目立つのはしょうがないとして煩くするのは止めておけ。俺は気にしないが周りの者が気になつて仕方がない様子だ。……次騒いだらお仕置きするぞ。」

彼の最後の脅しもあつてそれなりにスムーズに進んで行き、パーティーは終わりを迎えた。

「さて、お前ら突然だが今日のパーティーで何か感じたことはなかつたか？」

とあるホテルの一室で三人を集めて彼は切り出した。

「そういえば、今日の所は何か息ぐるしかったかな。閑そく感もあつた。」

「確かにそんな感じはしたわね。」

皆同意の意である。

「フフッ、あそこは格式やしきたりに厳しい所があるからな。まあ、その答えでも上出来だよ。では次の質問だ。お嬢様はちやんと見たか？どう思った。」

「言われた後見て見たけど、若くて綺麗？というか幼くて可愛いつて感じだった。新郎の方は三十も半ば程に見えたけど。」

これも皆共通しているらしく、一度三度と頷いた。

「それに、花嫁の方はどう見ても楽しそうでは無かつたわね。」

「あそここの家で生まれた姫は三つ頃になると、お城に閉じこもられたので教育が始まる。主にテーブルマナー、敬語、下の者への態度などあらゆる方面から指導を受けるらしい。親には会うどころか写真を見ることも叶わないらしい。そうして出来た心の掛けた人形を十五程の歳で他国との結び付きに用いる道具として使っている。だ

けどな、その子も夢をもつてているのだ。外を走つたり、空を見上げたり、なにより思いつきり笑いたいそうだ。人目を気にせず他者の顔色を伺つたりせず自由に生きてみたい、……分かるか？一見も二見もほんの些細な夢に見えることかもしけないがそれは当たり前で暮らしている者だからこそ意見だ。彼女にとつてはこの心が月並みのような発想なんだ。」

斜め上に固定されていた顔を正面に向け直した。

「この件は数日前に城の人間から頼みと一緒に聞いたものだ。……今は軍のことは全くと言つていよいほどまでに関係性が薄い事、つまり只の俺の私情だ。これで最後の質問だ。お前らは御姫様救出作戦に参加するか？」

「お前がやりたいんだろ。だつたら俺はやるぜ。」  
光輝が即答する。

「ここまで聞いて黙つてられないわね。結婚相手国のロリオジビもに女の子の強さ見せてやるわよ。」  
彼女も気合い十分である。

「で、お前はどうする？」  
「はあ、俺だけ行かない訳にはいかないだろ。行くよ。行けばいいんだろ。……つたく（もつと適任の人なんて沢山いるじゃんか）。」  
エディには不満も残つてゐる様だ。

「自分を卑下するのは悪い事だとはつきり言つことは出来ないし悪いとは言わないが、あまり自分を低く見積もり過ぎたりはするなよ。もつとお前は自惚れる。でないとその内自分を見失う事になつてゐてもしそれなぞ。今回はお前だからここに連れて來たんだ。……」

隊長を呼んで来い。」

2人は程々に聞いていたので何だと田を丸くしているがエディは急いで隊長の部屋へ向かつて行つた。

エディは最近自分の事で悩んでいる節が少しあつた。

そもそもかもしない。エディもまだ子供である。だが、子供においてはかなり強くると思っていた。自分が周りの者より劣っているのは年が離れているからだと言い聞かせていた。

だが、そうでないかもしぬとも感じ始めたのだ。

まずは彼の入隊である。最初こそ卑劣な手で掛かつてきただけれども、一年たつた今でも彼には勝つどころか放されて行く感覚さえしてくる。それも、彼の方は日中部屋で事務的活動に比べこちらは四六時中訓練にも関わらずである。

でもそれはまだ彼が天才だからだと納得しつることが出来ていた。

そこで彼女の登場である。

彼女は最初こそもたついていたが、その壁も数月もすると超えてしまいそこからの急成長は彼を除いた皆が驚いたことだ。最近では彼女と共に訓練に励んでいると氣を少し抜いただけで放されてしまつ程まで差が開いてきた。

自信もなくなつてきても不思議ではないと言える。

そして、今彼は、彼が自惚れると言った。下にみすぎるなど言われ

た。

自分でなくてはいけないと黙っててくれた。

自分に何があるのか聞きたい気分ではあったが、目頭が少ししあつくなってきて見透かされた様に言われて泣きそうになりながら飛び出して行った。

彼は自分がここにいていいのだと、ここで必要とされているのだと思い少し安心していた。

「隊長、あいつはここからですよ。これからは今まで以上に頼みますよ。」

「ああ、分かつていい。あいつは子供の出来なかつた俺にとつては我が子のようなものだからな。いくらあなたが止めても気にしますよ。」

「クフフッ、頼みましたよ。今はまだ小国を相手としているので問題になつてませんが、これから先の大國を見据えるとまだまだですかね。」

「ああ、それも分かつていい。」

そう思つてゐるつもりだよ。

貴方は何も分かつていない。何が我が子のようだ。年老いた主觀を持つたりしやがつて。

物事を総体的に捉えることの出来ない貴方には無理ですよ。

貴方の先は知れている。

囚われの御姫様 サアーン（前書き）

この小説を待つている人がいるのかは知りませんがいたら更新遅くて済みません。夏になつたら少しはマシになると思います。

## 囚われの御姫様 サアーン

警え私がおばあさんになつても、どんなに物忘れが激しくなつたとしても、

あの日あの時あの場所で、貴方と交わしたあの言葉、貴方と過<sup>ご</sup>じたあの時間、あの時あの一瞬に起つたどの刹那も、私はずつと覚えていきます。

私は死ぬまで忘れたく有りません。

忘れる事も出来ないけれど・・・

（御姫様の今夜一夜限りの騎士様）  
ゆかいなナイト

草木も眠る丑三つ時、城外に生い茂っている森の中に五つの人影が動きを止めた。

「やつとこのことで鉄壁を誇りにし続けている領主の待つ筈むしてきている古城に辿りついた訳ではあるが……準備はいいか？警備はいつもよりバージョンアップしているが……良くなくて始まるけどな。

「

顔の右半分を覆うほど仮面を付けた全身黒衣の少年が4人の方は一切向かずに背中越しにい語り掛けた。

「おつけです、サー。」

ジーパンに皮ジャンを着ている所までならそこいらで日がな一日面白おかしく暮らしているお兄ちゃん達と比べても遜色は無いが、腰に下げたホルスターに掛けられている銃と胸ポケットのアーミーナイフを持している所を見ると普通ではないであろう陽気な人物である。

「いつでもどうぞ、」。

彼女はロングコートを着て身を纏してはいるが、腕に空からの月光の反射で淡い光を放つていて短刀を握っている姿は町中に五分も経つていれば腕に鉄の輪つかが2つと鎖がついている物を取り付けられて非常時には信号を清々しいまでに無視出来る黒と白で色付けされた車に青い服を着た人達に乗せてもらえるだらう。

「えへっと、取り合えず生き残る。」

「生き残る事に取り合えず程度の価値しか見いだせないならお前の価値は知れるぞ。それに悩んだ結果にそんな仕様もないことを言う位なら、どうせなら一度は言ってみたかったカツコいセリフやロマンチズムなセリフを言ってみろよ。そんなどから陰でどこのか田の前で臆病者<sup>チキン</sup>なんて皆に言われるんだぞ。」

言葉攻めにされた彼ではあるが、背中越しに指を立てたのが唯一の反抗心だったりする。

「ああ、こちらも了解だ。」

最後になつたのは迷彩服を着た筋肉質のこうこう場にいると如何に

もという姿の人物であり、実際彼以外の者は場違いにしか見えないどころか子供なのである。

全員の確認が済んだ所でやつと仮面の少年は皆の方に姿をやつた。

「よし、じゃあお前等命をつなげ、俺らは打つて一丸となりボスから味方キャラを手に入れるぞ、分かつたな。」

言葉の代わりに皆は眼力で彼に気合いの程を伝え、彼もそんな旨を見てにやりと口をやつた。

「途中の言葉がよく分からんんだけど？」

「・・・日本の諺だよ。」

「後十秒で相手が笊ならメイドイン俺の爆弾がなる予定だ。」

そして、皆が心の内でカウントダウンを行つたが、何も気配はない。

「どうやら笊じやあないらしいな。じゃあ、次は5秒後の爆竹＆花火だ。」

パパパパパウウウン、ピューッ、ピューッ、

彼の言葉の途切れと供になり始めた愉快な音は中の者の爆弾が仕掛けられていたことで増幅されていった多大なる不安を数倍まで引き上げることになり、場内の警備及び上層の人間は慌てふためいた。さらに、城外にいる人が見た城から上がる花火の光景は披露宴の時のライトアップとは一味違う景色に見えていた。

「行くぞ、相手は猿だが油断は作戦に以上がないまでに抑えておけ。

パチツ

彼の指を弾く音で皆が一斉に一方に動いて行った。

僕はつい最近給与がそれなりという理由だけで親に入れられただけの極普通の警備兵Aだった。

最初は仕事が難しくて嫌々生きていたのだが、上司のクロロさんが凄くいい人だつたので近頃はもつと近くで働いてみたいと考えていた矢先に、爆弾を仕掛けた人物が現れてそいつを捕まえた者には褒美がでる、階段特進等と言わたれた日には精を出して皆が行きそうにない所を回っていたのだが、突然視界を黒衣が覆つたかと思うと、鳩尾に肘を入れられて悶絶しているところを人質にされてしまった。

そして、耳元で「私は世間で言つジョーカーという者だ。大人しくしていくくれた方が私も君もリスクは少なくすむんだ。……クフフツ、心配はそこまではいらない。クククククツ、君の頼れる上司のクロロ氏なら直ぐに助けに来てくれるはずだから、それまでの辛抱さ。…この紙は後で開きたまへ。」等とささやかれた時には大人しくせざるを得なかつた。手渡された紙は小さく丸めてあつた。

（此処の者にも平等に知るチャンスは与えたぞ。……君はクロロ氏が来るまでに気づけるかな？多分無理だろ？ なんせ君は彼を微塵も疑っていないみたいだから。）

彼が人質を捕まえて数分後に先の廊下の方が慌ただしくなつてきました。

先頭のクロロを筆頭に五人の者がやつて来て、その後ろを金魚の糞が続いてくる。

四人のお供と彼が四・五メートル先で動きを止めた。

「フフフッ、またお会いできましたね。クロロ氏。」

「そうですね。ですが、この騒動はどういうことですか？ 出来れば、左手のこれ見よがしに怪しげなりモコンと前にいる私の部下の事も知りたいのですが？」

左手にはいつの間にやら丸いボタンが三つある輝きを放つリモコンが握られていた。

「では、まず貴方の部下ですが、この少年は最近入隊してきたペル君隊員番号〇732、二十歳A型身長177cm体重65kgでこれまでの実績は特に無く、これからも当分の間は下つ端で貴方が覚えておくような人物ではありませんよ。（嘘を言い連ねているだけだがな。）

この時の反応は一種類であった。

素直に受け止めて凄いと思い呆気にとられた者と、彼にぞつとした者。もちろんクロロ氏が連れて来たもの達は後者の方で数瞬で目の

前にいる人物が自分達の思つてはいる以上に物凄いのだと感じた。

「後」のリモコンはね。実はと～ってもすんげえ爆弾さんを起爆させるスイッチだつたりしちゃうわけなんだなー。」

「それだと貴方も無事ではないのです?」

「のん、のん、のん、ノープログラムですよクロロ氏。爆弾の威力事態が大差あるのではなくて、真に怖れるべきなのは爆発により辺りに広がっていく新型殺人ウイルスの方なのですから。」

この声が聞こえる範囲にいた者がざわめき出した。始めに恐怖におののき声を上げた者の数はしれていたがその騒ぎは周りのもの達にそれこそ感染ウイルスの様に広がつていき、志向は完全に停止まだし冷静を装う者がなだめにかかるが、その甲斐はなくそこから少し離れた場所にいた彼と別の方に進んだ2人にも耳に出来た。

「フフフフッ、フフフ、ハハッハハハハッ。」

その騒動の中に一つのとても大きな高笑いが過ぎていく。

人間なんて脆い者だな。

ちょっとつづいただけでこの様だ。

それに、何が怖いのかも分からぬ癖に俺の手のアクターに便乗しやがつて。

・・・・・だから、嫌いなんだ。

「隊長、今のつて？」

「ああ、」の言つていた合図の事だろう。行くぞ！…」

「はい！…」

エディと隊長は城のジョーカーとは反対側にある扉の油断し切つて  
いた門主二名を吹き飛ばして勢いよく城の中に入つて行つた。

數十分前 林

『エディと隊長はまず、城の裏側の扉付近で待機だ。そして俺が大きな何でもどんな変な音でも兎に角合図を出す。そしたら一気に扉の前にいるものを氣絶させるのがベストだがしなくてもいい、入つてこい。そしたら後は敵の主力人物が来るまで適度に暴れて人を引き付けておいてくれ。隊長にパーティーの間ずっと城を見学させていた報告を聞いて思つたことだが、恐らく城を傷つけるような銃器類は使ってこない。となると必然に接近戦になるが2人ならなんら問題はなかろう。

……隊長手筈通りに。』

その時、2人は目配せをして意思の疎通を行つた。

ドカツ、バキツ

2人は彼の言われたとおりに適度に暴れていた。

「それにしても、いつたい何人いるんですかね？」

「さあな、だが幾等多人数でも下つ端にはここまで訓練が行き届いていなとはな。」

二人の人間に何人の人がやられるのも情けない話である。

「そうですね、この分だと要の人物も大丈夫そうですよ。」

そして、今度は4人が近づいて来た。

前を行つているエディは一人、二人、三人と倒して最後の人物に駆け寄る。

そのものは長い袖で腕を隠し、帽子を深く被つて少し不気味な感じであつたが、エディは構わず走り寄り、目の前まで来た。

……その者の不気味な笑みと後ろの隊長の静止の声にも気付かずに。

ザシユツ！！

「エディ！！」

彼は騒動の中から抜け出た後、迷うことなく城を走り抜けていった。

それもその筈、彼にはクロロ氏と言つし案内役が居たからである。「それにしても凄かつたですね。あれのお陰でここの中が思いのほか進みやすいです。」

「クフフッ、だけど本題は次の相手からですよ。ね、お爺さん。  
「ひょひょひょ、よもや氣付かれておつたとわ。流石、ペルソナ クラウジ仮面の道化の名は伊達ではないということかの。」

呼びかけられると後ろから前に一人の身軽そうなお爺さんが回り込んできた。

「クフフフッ、クロロ氏。では手筈通りに。」「ええ、我が師は私が相手になります。」「ふおつほつほつほ、お前も懲りんやつじやな。」「ガキイイイイイン!!

クロロ氏は背中の身の丈程の大剣を爺さんは腰にさしてある細見の剣を交えて受け、彼はその横を堂々と横切って行つた。

「師匠、随分と簡単に通してくれましたね？」  
「ふおつふおつ、偶には弟子と剣を交えるのも悪くないと思つての。」

「

クロロは大剣を何とも無さそうに素早く振るい、一方爺さんは軽快な身のこなしでそれを避けていく。

「隙有りじゃ。」

大剣を大きく振るつたところで、彼目がけて剣を突きだした。

違う、異か？

大剣は床に刺さりそれを軸にして止まつて突きを避け、同時に蹴り飛ばした。

だが、直前に気付かれた事もあつてか大したダメージはない様で軽快に一回転しての着地を決めてみせた。

「ひょひょひょ、少しばらるよつになつたよつじやの。おちおち舐めてもいられんようになつてしまつたか。……では、次からはちと本氣でいくぞ。」

「望むところです。勝負です、師匠。」

互いに剣を相手に向け、視線を合わせていた。

先ほどから少し城内が騒がしくなつてきている。

私には関係のないことですね？

私は明日結婚してやつと城外にでられるのだから。

その先はまた直ぐに向こうで部屋の中でも暮らすとしても。

希望を言えれば自分の足で外にでて自由に行来きしたいのだが、  
その様な希望はもう随分前に捨ててしまつた。

いや、この様な考えが思い浮かぶのはやはりまだ希望を捨てきれな  
いから。夢を見ていいから。

ここ以外の世界を、お父様の所に来る前の母様の居た場所で暮ら  
してみたいから。

でも、それは叶わぬ願い。だつて、私は……。

「じんばんは、ご機嫌いかがですか？王家の囚われの御人形さん。」

## 囚われの御姫様 サアーン（後書き）

この囚われのお嬢様編は長いです。

俺としては前編、後編で行きたかったんですが、思ったより書くことがあつて長くなつてますが、次がこの編の最終です。

これが終わつたら少し対戦とは離れて日常行つてから大戦に突入させるつもりです。

早く革命させろ～って思う人もいるかもですが、日常も大事ですか  
らねつて所で終わります。

## 囚われの御姫様 フォー

「つして大きな夜空を眺める事が出来て、おもにきり外で風に吹かれながら走る事が出来て、皆と楽しく会話して、笑つていられる。

皆は当たり前とか大袈裟だつて言われるけれど、私には人一倍幸せに感じていられるのなら、あの場所で暮らしてきたことの全てが無駄じや無かつた気がします。

いつかは皆で貴方も一緒に・・・・・・。

「騎士様といろんな動きと思惑」

「こんなばんは、この機嫌いかがですか？王家の囚われの御人形さん。」  
彼は目の前に佇む少女を下から上まで見つめた。

少女の顔つきは可愛らしい顔の割に14~5の年齢にしてはしつかりとしたものにみえるのは憂えを含んだ口ときりつと結ばれた口元の性だろうか。服装も城にあつた着るのに時間のかかりそうなしつかりとした物であつたがこれは特別な日だからなのか、又普段から

こうなのかは分かりきらないが、着こなしは上々である。部屋の周りの家具も高級感こそあるが別段使われている様子もないことからアンティーケ扱いなのである。

飾りはしつかりとしているがここは中身のないものが多いな。そんなことだから数人の侵入者としつかりした内通者一人だけに踊らされるとだよ。

彼は大丈夫であるが、少女の方はこの沈黙がお気に召さない様子でそわそわとした。

だが、このような事態にあったことがないこともそうだが、自己表現をしたことがあまりない彼女は何を言つたらいいのか良くも悪くも分からぬお手上げ状態のようだつた。

彼はそんな彼女の様子は気に入ったのだが生憎と時間が余りないので。

だ。

「私達は先ほどから場内を騒がせていたのですがそれは知つていましたよね？」

彼女は頷く。

「実はあれは貴方のためなのですよ。アウロラ王女、貴方は今決断の時に至っているのです。今ここでこの王家の古くからの習慣による柵の鎖を断ち我々と供に貴方の抱いていた自由を辛くなるか樂しくなるかはこれからだが現実をそれらを得るため、掘むために自分の足で動くか、それともこのままここに残つて普段の貴方の中に型付くられた日常をただただ平和に生きるのか、シンプルな答えが欲しいですね。第三の選択肢というのもありますよ、どうしますか？」

普通の人間が彼女は怪しいが家柄を除くと普通の思想の者がいきな

りこのような選択を迫られて対応しきれるだろうか否、出来はしま  
い。日常の中に異常とは得てして突然現れるものであるが備えの無  
い者の前に現れてしまつと何のアクションをおこすことも叶わなく  
なつてしまつのだらう。

彼女は悩みを頭に送り続けた影響で困惑を起し始めたのだが、彼  
は人を洗脳とは人聞こえが悪いが良く聞こえる様に例えるなら導く  
ことには昔からかなりの時間と経験を積んでいるのである。

「申し訳ないのですが、私達には貴方に十分な考へる時間を与えて  
いられる程の余裕を持ち合わせていないので。ですので決断はぎ  
りぎりまで待つことにしましよう。取り合えずは私と行動を共にし  
てみませんか？貴方はこの城の中でさえ自由に歩くことが出来なか  
つた筈です。そして、それをしてことで何か考へが浮かんでくるこ  
ともあるかも知れませんよ。」

「でも、貴方達は……いえ、でも……。  
まだ彼女は答えあぐねる。

「私達について来て貴方が普通の暮らしことはかなわないで  
しょう。ですが約束します。必ず貴方には自分の意思による行動が  
出来るようにはします。まあ、それはここを無事に出れたらの話し  
であり途中で失敗することもあるかも知れません。そして、それに  
より貴方がこここの者による罰則を受ける事はないようにもします。  
貴方は、無理やり連れられたとして我々は動機を話すこともありま  
せん。……さあ、王女信用して下さいませんか？」

彼は彼女の方にすっと手を伸ばす。

彼女の手が焦れつたく徐々に伸びていき、彼の指に触れた所  
で又少し引いてしまつた。その時に彼が微笑み彼女は相手との迫つ  
た距離に気付き妙に恥ずかしくなつたのか、頬を赤く染めて顔を斜

め下に向けて手を掴んだ。

「では、行きましょう。」

彼女は一度も後ろを見ようともせざ手を引かれていった。

自由は「えてやるがそれを生かすのも殺すのもお前次第だけだな。  
世間知らずの御姫様がこの悪意と私欲の世界でどこまで出来るのか  
見ものだな。

「お前の幸せが誰かの不幸にもなるんだぞ。」  
誰に言つでもなく小さな声で呟いた。

キン、ガツ、ガガガツ、

決して広くない廊下で老人と青年が一進一退の激闘を繰り広げてい  
る。

「本当に強くなつたのう。ついこの間までもつと簡単に捻られて可愛かつたというのに。それに、わし等の為に教えた剣術をわし等に返されるとはそれもお主がとはいやはや青年の心とは分からぬものやう。」

クロロが距離を取つたのを見て言つた。

「ははっ、何を仰しゃいますか。私が真に仕える主は昔から王女様でありそれは昔にあの人の母君にお願いされてから少しも変わりありません・・・よ。」

彼の確固たる決心は迷いのない剣跡から伺える。それは師である老人には始まりから分かっていた。では自分は彼に本気で対応出来てはいるのか？いや、そうではない。まだ本気で向かい合うことは出来ていないのだ。今までしてきたように遊びの軽い気持ちでしか彼に向き合えていないく、それが真剣な相手にどんなに失礼か自覚してもやはり愛弟子である彼には出来ないでいた。今対峙している相手が違う相手であったなら、そのような考えが実力で上回つていても彼を捉えきれない要因になつていて、全盛期を過ぎた体に加えて無意識に鈍らした動きは必要以上の体力の低下を招いて避け続けていた攻撃を今では全て剣で受けているのが現状である。

「何を考えてるんですか？」

ガキイイ、ドゴオ

老人は隙を突かれたことで剣を上に弾かれ腹に蹴りを貰つてしまつた。

「ぐうう、老人は労わるものだと教わつたことがなかつたかの？」  
「戦場で情けを掛けてはいけないとも貴方に教わりましたよ。」

老人ははつとなつたようにして表情を滲らせる。

「そうか情けか。……どうしても……どうしてもわしを越えていくつもりか？」

歴戦により身につけた氣をぶつけながら言い、それを真っ向から受け答える。

「はい、貴方が王女の鎧の一部になるのなら。」

「……一目見て感じた。あの男は信用ならんぞ。お前が利用していく気になつていてもあやつはその氣さえも飲み込んでいるような恍惚な奴じや。」

「それを見抜く眼力は持ち合わせております。」

「全て承知の上でと「う」とか？」

「…はい。」

「！」の老人がこの歳になつて又趣味以外で戦うことになるとはの。言葉はもうこらぬ。行くぞ。」

「はい。」

そして、老人とクロロとの戦いは第一ラウンドに突入した。

「エディー！」

一階のフロア周辺に威厳のあるしつかりとした声が響いた。

エディは帽子を被った男の後方に勢いよく飛ばされていったが、直ぐに立ち上がりて相手を睨んだ。

「まさか僕の方に飛んでくるとは考えなかつたよ。咄嗟にしてはいい反応だね。普段の振舞いは兎に角として動きはしつかりしてる。歳の程は見た目では背が一七〇cmあるかないか程度の小柄な所と今聞いた声で判断すると、二十回りに思える。

「避けれるや。俺達はこここの奴らみたいなやわな訓練受けていないからさ。」

少し切られた腹をさすりながら言つた。

「ははっ、言つておくけど僕等も君たちと同じ不法侵入者だよ。この人間とは一度も面識なんてないからね。」

一人は訝しげな表情を見せた。

「じゃあ、……何なんだ？お前達ってことは何処かの国の者なのか？」

「特にこれと言つた名前はないんだけどね。強いて言へば……神の使徒かな？」

相手は随分と自信を持つて堂々と宣言したが、これで納得する者も居る筈がないだろ？

「ふざけてるのか？」

「別にお前等に理解してもらつつもりはないさ。ん~で、そろそろ話しも止めにしないかい。そろそろ殺りたいんだけど。」

隊長が前に進み出たが、その前にエディが出た。

「隊長ここは大丈夫ですよ。隊長は隊長で、から言われてやる」と  
があるんじゃないんですか？……本当に大丈夫ですって。いざとな  
つたら逃げますから。それにこれは俺が受けた戦いですよ。」  
隊長は何も言わず、その場を後にした。

「じゃあ始めよつよ。」

相手はうすく笑いを浮かべてエーティに襲いかかってきた。

誰だ。彼は思った。

彼と御姫様が廊下を歩いていると右の角から一人の男が姿を見せた。

「こんな所で何をなさっているんですか？」

彼は御姫様から手を放して言った。

「貴方をお待ちしていたんです。」

男は答える。

「私を、それは何用ですかね。」

「神の命を受け貴方を殺すために来たんですよ。」  
何だと！－

瞬間彼の気配が豹変した。

普段纏っている人を斜めから見ている様子であるが、彼の言葉を聞いた途端に相手を田を見開き真っ向から対峙した。

今…こいつは何と言った。神、神だと言ったのか？宗教者か？いや、殺しにきたんだぞこいつは。

俺を、神の命を受けて。そう言ったんだ。そういう意味だこれは、

「どうしたのですか？」

男の顔には少しの笑みがつかがえる。

黙れ！聞くことを訊いたら貴様は直ぐにでも殺してやる。それよりもあいつだ。いまさらになつてこんなことを、殺すなら5年前のあの時に殺せば良かったものを・・・。

ん、ふつ。

ふつ、ふふつはははは、貴様がそつしたいのなら思い通りにさせ  
るか。

「お前殺しに来た・・・と言つたがその真意は何だ。ただ単に俺を  
殺せと言われただけか。」

彼は姫を下がらせてジョーカーを止め、彼個人として相手と対峙し  
た。

「さあ、私は神があつしゃつたのできたものですからね。唯最近貴方の元に勢力が傾き始めたと聞いた事はありますけどね。」

待て、今の言い方。」  
「これは本当に神を知っているのか？それにこいつは馬鹿なのか、こんなに簡単にべらべらと内情を喋り出すとは。

「お前、自分達の事を簡単に話してもいいのか？」

「大丈夫です。殺す前に貴方に質問を受けたら話してもいいと思つたことは喋つてあげなさいということなので。」

そうか、あいつは何処までも俺を舐めてくるようだな。その方がやりやすくていいが不愉快だ。

「済みませんが次で最後の質問にして下さい。次の仕事がありますから。」

くそつ、あと一つか。それに答えられないものもありそうだな。最も俺にとつては意味のない事だがな。

彼は右の目に手を置いて考える様な素振りを見せた。  
そして男には死角になるように笑みを作る。

：行くぞ。

「無駄だと思いますよ。貴方が神から貰つた『物』の事は聞いていますから。」

まああいつは神だからな。この力のことを把握していくもおかしくはないか。

これを使うと疲れるからな。止めた方が良さそうだな。

「では、最後にして聞いつけ。……俺は誰だ。」

「クライシスのトップのジョーカー。」

世間一般に通ずる率直な答えだ。

「そうだ、その通りだ。この不安定な世界を揺るがさんとする危機で  
あり、名前を捨てて世界の脅威となつた仮面の道化だ。<sup>ペルソナ クラウン</sup>神だろうと  
俺は止められない、……その部下如きが俺を止めるとと思うなよ。」

「そうですか。」

ドドウアン

神の刺客は懐から銃を取り出し彼の顔に一発放ち、それを受けて彼  
はうつ伏せで床に倒れた。

## 囚われの御姫様 フォー（後書き）

前話で次終わると書っていたのにも関わらず終わらせられませんでした。

何かこのままだと軽く一万字超えなんでもまた分けることにしました。時間も掛かりそうですし。

次の更新は遅くても一週間以内にはします。

更新遅くて済みません。

## 神と彼の奇妙な物語

昔、彼が神と言われる者に出会ったのはまだ9歳になつて間もない頃の事だった。

彼はその日にいろんな事を体験しそうだったのだ。

幼きころからの良き友の裏切り、周りの大人の金と生への執着、親との隔絶、そしてそれらの後に彼が慕っていた者の生を目の前で止められたのだ。

神と名乗る者に。

これ等の自称は彼に絶大な影響を与えた。今まで繋ぎ止めていたものがたつた数時間足らずでなくなってしまう物だったのだ。その程度の物でしか無かったのだ。人と人との関係なんて。一日過ぎたら忘れる事もあれば何年経っても恨みを抱えていたりすることもある。そんなものだつたのかこの世の中なんてと・・・。

神は肉塊から剣を抜き、血を払い、少年を見据えて言った。

「死ぬ前に一言下さい。」

彼に剣を振り上げながら声を掛けた。その質問に少年は鼻で笑つて答えた。

「はっ、お前が神なら俺は魔神だ。」

「君みたいな子供がかい？」

神はこの言葉を聞いて少し興味が出て来たので一言口を促した。

「はん、魔神にも、幼少期つてのはあるんだよ。今の俺がそれだ。だがな、後数年してみろ。どのゲームの最後を飾るボスなんてめじやねえよ。此処で殺すのはちと時期早々だ。」

神は剣を鞘に収めた。

「ふふつ、そんな時が来るなら確かに嬉しいねえ。うん、そうだね止めておいた。君がこの先どうなるのか『この先も』見てみたくなつた。」

「何？何を言つてる。殺すんじゃないのか？」

「それこそ何を言つてるんだだよ。僕は暇なんだよ。暇だから人に知恵を与えて暇だから欲を与えて暇だから力を与えたんだよ。そのなれの果てが仮りその平和になつたんだよ。でも、そんなの面白くもないんだよ。動かないものを見ても詰まらないだけさ。だから自分が動いてみたんだけど、人を殺すのも詰まらなかつたよ。僕にはいろんな物が一度に見えるんだけど。今日の君はここ一年間で一番面白かつた。それに君つてこの子死んでも泣かないんだね？悲しくないの？」

後ろの死体を指差して聞いた。

「……悲しいよ。お前を今直ぐにでも殺してやりたい位には。涙なんて……俺は義務以外では泣けないんだよ。その前に俺に涙腺があるのかももう怪しい位だ。」

もつゝ歳の発言とは考えにくいが彼はそう言つた。

「ふうん、そんなもんか。まあいいや。じゃあ僕はもう帰るけど君にこの仮面を渡しておくよ。」

神は何処からか黒くて黄色の模様が施された仮面を少年の手に持たせた。

「それは君が後数年になつたら付けて、それが君の為になり。僕のためににもなるものなんだ。君が嫌がつてももう遅いからね。……いつか僕を殺せるといいね。」  
いきなり現れた神はまた突然いなくなつた。

辺りにあるのは死体とひそひそと話す「ミミ」だけだった。

何なんだこの仕打ちは。

結局は生かされたのか？あいつの暇を潰すおもちゃになつたのか？  
全てを無くして最後に残つたのはアイツの物だと。

ふざけるなよ！何だあいつは！何だこの世は。  
何で俺がこんなことをされなくてはならない。

何でこんなにもこの世は不条理で不公平なんだ。

弱者は平然と切り捨て強者はのし上がる。  
何でこの世はこんなに醜い。

何故人は人のことを他人だとする。

人なんているのかよ。

要らない。

こんなやついらなら俺は要らない。この世に要らない。

……無に帰してやる。

だが、ただ無に帰しては駄目だ。

それじゃあ面白くない。

下剋上、上トの変化、上の者を下にして下を上げる。  
それで拮抗、だがそこに僅かなずれ、ずれからまた格差は生まれる。  
それはまた明確になる。これじゃあ駄目だ。

そうだ、全員上には無理だ。……下を見せてやる。

そして、……神を殺す。

## 囚われの御姫様 ザ・ファイナル

世界が泣いている気がした。

世界が壊れる音が響いてくる感じがした。

神の笑い声が聞こえてきた。

神の悲しそうな顔がそこにあつた。

人間を見せられた。

人間はよく分からなかつた。分かりたくなかつただけだと知つていた。

自分を見た。

とても、とても……い氣がする。

天女姫

「ジェイ！」

彼の体が地につくと共に彼の背後から神の使いに月明かりに怪しげな刃紋が浮かびあがる白い短刀を構えたエレナが飛びかかる。

ギィィィイン

男は手にしていた銃で太刀を受ける。

「……切れない！」

驚くのも無理は無いだろう。彼女の持つ短刀『白月』は大抵の者は豆腐の様にスパンと切れる優れものである。

「貴方にそれは少し宝の持ち腐れですね。」

ドゥン、

彼は余っていた左腕を懷に入れると取り出さずに上着の下から打ち込む、彼女はそれを打たれるギリギリ前に察知して避け、距離を取るとすかさずアーミーナイフを投げる。

「良く鍛えられてる様だな。だが、甘い。」

彼はあるうごとか左腕でそれを受けた。尤も右の側は彼女の方に標準を合わせている様だ。

彼女も直撃こそ受けたが幸いにも当たった場所が足だつただけに直ぐにどうこうということもない。

「良く鍛えられてはいるが、それでもまだ足りない。若いのに惜しいですね……命令なので。」

ドウツッドウツッ！－

「ぐうう、モ…モ…。」

「うふふはは、貴方も甘いですね。……貴方の私に対する評価は少し低い所にある様だが…残念でしたね。私はまだ死んできませんよ。」  
男は足と腹を打たれて這いつくばりながら彼を睨みつける。内臓が傷ついたのだろうか。時折に血吐をしている。彼の方も頭が切れた

らじく血が流れている。

それにもしても、余程の事がない限り出でくるなと言つておいたのに……ま、仕方がないか。

「あ…おま…どう。」

「俺の事は知らんでもいい。それより最後にもう一つだけ教える。神の奴らは何を企んでいる。」

「い…それは…言えない。」

「いつが馬鹿で良かつた。…ありがとう。」

「約束通り最後にしてやる。……神の使いの墮天使は全員例外なく地獄に墮ちてる。」

さてと、少しどこではない位時間が滞つてしまつたな。

「エレナ、大概の事では出でくるなと言つておいただろ。」

「だ、だって、死んだと…心配される様な事するからでしょ。」

お陰で相手の気がそれたから助かつたんだけどな。

「助かつたよ。」

「え…。」

「足…見せろ。」

彼女の足に応急処置を施し始める。

「…見事にやられたな。」

「うん…痛つ、手も足も出なかつた。」

「負けたらどうする。」

「強くなつてやる。」

お前は加速し続けるタイプだからな。その氣があれば強くなれる。

「ふふつ。」

「笑うな！」

「強くなれよ。俺達は大国を相手にするんだからな。もうこいつなら五右衛門ぐらい強くなつちまえ、その剣だつて斬鉄剣なみの威力は有る筈だしな。そうだな、本当にそれ位強くなれよ。アイツは銃弾だつて切つてたぜ。」

応急処置も終わった。

そういうえば姫さんは何処行つた？

光輝と一緒か？

「おい、光輝と姫。」

「お呼びか？」

呼ばれると直ぐに姫と供に姿を現した。

「ああ、呼んだ。もう時間を掛けたくないからな。チートを使わせてもらう。もう後ろの警備は良いから姫さんとエレナを連れてそこを右に曲がつて付きあたりの左の壁は壊すと道が出来るからそちら外に直で行ける筈だから行ってくれ。無かつたら窓壊して行け。」

「了解。」

アイツはすぐ行動するから良いよな。疑問はあるんだろうけど……。神の奴はこんなしたつぱを使っていいぜんたい何を考えているのか？

彼は死体のポケットを探つて中から携帯電話を出した。

履歴は全て消されてるみたいだな。リダイアルも無しか。一件の登録も無し。ポケットの中に電話のメモもない。記憶していく可能性は考えられるが……これは相手からの一方的な物だと考えてよさそ

うだな。貰つておいつ。

「」は済んだ。次に行くか。

「くそつーーー」

ガキ、ガツ、ガガガガガツ

「はつ、はつ、ふつ。」

「どうした。若いもんがそんなに直ぐにばてたりして。」

「のじじー、…………やつぱり強い。だが、

「これからを担うのは若い人達ですよ。貴方にはもう退いてもらいます。」

「先ほどから言葉だけは一人前じゃな。喋らず剣をだせ。」

クロロの体はもうかなりボロボロであるが、爺さんの数個の傷はかすり傷である。

分かつてますよ。

やはり彼の言う通り今の私では良くて相打ちか。  
いや、それならまだいいが…くつ、らつ、…」のままだとそれも出来ずになってしまう。

彼は勝てないよつながの後ろの階段前に誘いだせとのやつだな。

ガツ、ギギン。

良し後退していくとは出来る。

ここに辺りか？

もう後ろには行けないな。少し不味い。

「追い詰められたようじやな。」

爺さんがそう言つと階段の上から声が聞こえて来た。

「それが自らを省みた言葉だとしたら上出来ですがね。」

なんとか間に合つたな。もう決着はついてるものだと思つていたんだが……ここも予定より遅いのか。

「残念ですが、2人とも終わりです。」

彼はマントの内から先ほど大勢の前で見せたボタンの3つついたリモコンを取り出した。

「クロロ氏は見たことがありますよね。実はこれ、あながち齧しだけとも限らないものなんですよ。ナニ、爆発しますよ。」

ドツ、オオオオツ

「そり、ここちに来てくれないと。」

クロロは彼の方に爺さんは後ろに下がりそれぞれ爆発から逃れた。

そして、爺さんの居る廊下の端から端まで見るからにヤバそうな色

の氣体が包み城に空いた穴から外へと出て行つた。

爺さんは苦しそうに又悔しそうに見えた。

「クロロ氏、あの虫の息の人の後の事は貴方に任せます。先に行きますが直ぐに来て下れ。」

「分かりました。有難う御座います。」

クロロはやうへつゆうへつと爺さんの方に近づいた。

爺さんは蚊の鳴く様な声で話す。

「…………じたんじや……そんな泣きそつた顔をして……。」

「私はずっと貴方を超えたいとは思つていましたが、」このような形で戦う様な事は……」

「ふおつ……ふお、お主は自分の考えを貫いつとしたんじやうつて……」

「ワシの死期はすぐそこじやが、一つ頼まれてはくれんかの。」

「何ですか？」

「ワシはお主をあの子よりよつぱんど孫の様に……いや、自分の欲に溺れ人の道を踏み誤つた息子よりも可愛く思つておつたのじや。毒などに殺される前にお主の手に掛けくれんか？それならまだ本望と言える。」

クロロ氏は自分の剣と爺さんを交互に見やつてから答えた。

「はい、分かりました。」

ワシの人生の最後は少し苦しくなつてしまつたのう。

クロロに殺されるとは思わなんだが、これも若き日のつけか。

クロロ、ぐれぐれも氣をつけるのじや。奴はあるの時お主も……一緒に

に……まあ……いいか……の、

後日クロロ氏はここから持ち帰った彼の刀を墓標の前にそつと置いて三十分の長い黙祷を捧げたのだった。

ドシッ、パリイイイイン！－！

「痛つてーー。」

このままじややられる。それに思つてたより大分強いな。

エディが敵に蹴られて一階の窓から外に飛び出した。一いちらも劣勢の様である。

「君はある強そうなオジサンの代わりとして戦つてるんだからもつと頑張つてくれないかな？それと逃げるのにも相応の力は必要なんだよ。」

確かにアッシュの言つ通りだ。俺は多分こいつから逃げられない。でも戦つて勝てる相手でもないからな。あーやべ、隊長にかつこい事を言つたけどきつこいつに煽てられて少し調子に乗ってしまった10分前の俺殴りてえ、どっかにタイムマシン落ちてねえかな。つて俺――落着け――まだやれる、やれる筈だー。

俺はやればできる子だつて言われてきただろ。

「いいかな、続きやつても。」

「あ、ちよつと待つて。」

「うん。」

「

ええーいいの。待つてくれるの。

てか、こいつこんなキャラだっけ。仕方ないこいつなつたら……いきなり攻撃。

「はつ、やつ。」

「

バシッ、パシン、ぐいっ、ドツ

一撃目のパンチは弾かれ一撃目を掴まれ手前に引かれて腹に入れられた。

「ぐうひ…くつ。」

奇襲にもかかりやしねえ。レベルが違う。レベル10は違うな。それもケモンの方でドラクなら装備で何とかなるけどポケモはそんなのないからな。もつとも相性とかはあるけどあいつ武器隠してるし俺素手だからいとは言えないだろ。俺格闘で相手若みいなもんだよ。てか何であれって水の技が炎以外のタイプにも効果抜群だつたりするんだ。水浴び出来ねえんだつたら全身めちゃくちゃ臭いんじゃねえか？そこらへんどうなんだろうて違うだろ。現実逃避してんじゃねえよ俺。ポケモ談義はいいよ。R団の隊員の生命力ゴキブリ以上とか気にしてる場合じやねえよ。相手も携帯出して何か始めてるぞ。嘘だろ、何でゲーム始めてんだよ。てか俺一人ごと長いな。村 斬より長いんじゃね。このネタは皆には厳しいか？もう戦おつ。

「行くぞ。」

「あ、セーブ。…………来いや。」

二人が打ち合いに入る直前上から爆発音が起こり、瓦礫が落ちてきた。

この時帽子男はエティから目を切り瓦礫を避けることに神経を注ごうと考えたが、エティはこの時しか無いと考え、瓦礫を気にせずに敵を思いつきり殴り飛ばした。敵が怯んだ隙に連撃を与えるために近づく時、右肩に大した大きさでは無かつたまでも数十メートル上からの物だったので怪我もそれなりだったろう石がぶつかった。それでも彼は怯まずに相手を吹っ飛ばした。

相手は窓から再び城の中に行つた。

はつ、はつ、お願ひだ。もうやられててくれ。

数秒が経つた頃だ。

城の中から銃声が聞こえて來た。

エティは新手の敵かと身構えるが、中から出て來たのは彼だった。

「おいおい、お前は甘いな。氣絶でほっておく積りだったのか？あいつは俺達を狙っていたのだから此處で殺しておるのは定石だろう。もつ引き上げるぞ。言いたい事は帰る途中に聞く。」

「

「殺したのか？氣絶してる奴を。」

「お前は聴力を失ったのか？聞こえただろ。銃声が。敵が来るからもつ引き上げるぞ。言いたい事は帰る途中に聞く。」

ここにも左腕もそつだがボロボロだな。よく全員生きてたよ。ホ

ントに姫を助けるのに良い経験になるだらうと連れてきたが、良かつたのかな。

帰りのヘリの中では隊長と彼を除く皆が疲れで眠りについていた。

「ジョイ約束の物だ。それと、地下の奴らは勘が良いのか。俺が行つた時にはすでにどこかに消えていた。データも消さずにな。余程急いでいたのかとも思つたが、後で爆発が起こつた事を考へると見切りをつけていたんだろう。今頃は新しい場所で研究の準備をしているのだろう。」

「ああ、報告ありがとう。」

「それと、Hディの……いや。何もない。」

彼が受け取ったのは小さなチップとCD、封筒を各々数点づつだった。

ふむふむ、ふふふ、ハハハハハツ

王と研究員を逃したのは惜しいが、本当に割にあう成果だな。

遂にこれで人類の脅威の核に次ぐ戦争兵器を手に入れたぞ。あの王の動きが怪しいと言われて来て見たが、これ程の物が手に入るとは、神は俺の敵だが、悪魔は俺の味方といつことか。

これで又一歩野望に近づいたな。

彼等が帰ってきた所は時差等の関係で日が落ちた頃だった。

取り合えずエレナとエティを手間に出して、クロロとアウロラ姫とで彼は部屋に連れて行つた。

「それで、結論は出ましたか？お姫様。」

「いえ、…………まだ……。」

やつぱりか。この人は今まで自分の自己表現なんてしてこなかつたから自由と言つても持て余すだろうな。

「でも、あの……。」「何ですか？言つて下さい。」「私何でもしますので此処に置いてくれないでしょ？お願いします！」「…………」

これは…吃驚したな。まあ、これでも助かるけどな。

「ええ、良いですよ。貴方には何か考えておきましょ。今日はこの部屋で休んでいてもらいますけど。クロロビ。」指をくいくいと動かして近づかせる。

そして、小声で言つ。

「貴方には姫様を養う分に働いてもらいたいのですが？」

「……分かりました。元より貴方には今回借りが出来ましたからね。」

「では、貴方も今日は此処で休んでいてください。私は忙しいでまた。」

そう言って彼は部屋を出た。

「くそつ、あの野郎一発も打ちやがつて。」

彼は医務室で自分に手当をしていた。

「何やつてるんですか？ 一人でこんな所で。」

「何、と言われましてもですね。ミハネさん。では、一に青春真っ盛りの男子学生ながらにお色気ムンムンの奇麗な女医に会いにきた。二にちょっと眠気が襲つて来たりしてだるいから腹が痛いためは熱が出たことにして眠りにきた。三は怪我の手当てつてところで

すかね。」

「一ですか。でも、綺麗だなんて言われても私にはもう直ぐ4歳になる子供もいますしだめですよ。」

「あ、そこのガーゼ取つて下さい。」  
突っ込んでも良かったのだが、何かそうすると負けな気がしたので奇麗にスルーする

「あれ、突っ込みがまだですが。」

「もう4歳になるんですか？早いものですね。最初は嫌われてましたけど最近ではすっかり懐いてきましたしね。」  
突っ込んだら負けだ。俺は負けないぞ。

「そうですね、貴方も今では懐きましたからね。大人の女性に奇麗なんて言えるくらいに。」

「昔は僕もまだ若かつたですから。」

「突っ込んでくれないと食事代請求しますよ。」

勝つた。

小さく死角になる所でガツッポーズを作った。

「良いですよ。お子さんも大きくなつてきましたし。給料どうしようかと思つていまつたので。俺が一ヶ月払つたら足し位にはなるでしょうし。」

「ふふふつ、冗談ですよ。それにしても、一人でこつそりくるなんて貴方らしいですね。」

一瞬ぎくつとさせられた。何とも不覚だ。

「どういづことですか？捻くれてるつて事ですか？」

「ふふつ、他人本位ですもんね。」

「……貴方もね。」

「これは皮肉だ。この人のこういう所は少し苦手だな。何か普段の調子ならあしらえるのに、シリアスな展開だとちょっと……。」

「これでよしです。くれぐれも無茶は止めて下さいね。貴方が皆が自分をどう思つてるか考へてるのは分かりませんが、ネガティブなのは外れですよ。」

「ありがとうございます。」

ふう、休めるのは何時間後かな？

彼が動きを止めるのは随分先の事だった。

## 囚われの御姫様 ザ・ファイナル（後書き）

堂々完結、よかたですー。

設定纏まらない内からスタートした訳ですが何とかいけたつて感じですね。

皆のキャラ位置もこの章を書いていく内に勝手に定まった感じですからかなりの見切り発車でした。

途中のシリアスな所をコメディーチックにしたかったのですが止めて良かつたと今は思います。

では、今回もこの辺で。

## 今日の友は明日の敵？

彼は良く空を見上げる。

空は白いからだそうだ。

皆が首を傾げてどうして？と問うが彼は決して語らつとはしない。

彼は今日も今日とて空を見上げていた。

「起きて下さい。御姫様。」

アウロラ姫は余程疲れていたのか、ヘリの中で仮眠を取り、夜もはように寛静またにも関わらず彼が6時過ぎに起こすまでずっと眠つたままだった。

「あ……えっと……ッ！お早う御座います。」

まだ少し寝ぼけているみたいだな。あの城ではちゃんと徹底されでたんじゃないのか？」という事も。

「おはよっ。ふふっ、突然ですが貴方には今日から学園に通つてもらります。」

「…学園？…あ、猫。」

彼女は学校という単語に首を傾げ、彼の肩の上に奇麗に乗っている小さな黒猫に興味を持った。

学園？つておいおい。

「学園というのはですね。同じ年頃の人気が集まり勉学をしたり時は遊んだりして過ごす場所の事です。何でもする、と仰ったなんですから。まずはそこで一般教養を学んで下さい。後、こいつはどこかでトラウマでも持つたのか、あまり人に懐かないんです。リビット言うつ俺がつけた名前があるんですけどね。メスらしいです。」「触つてもよろしいですか？」

学園の事を聞いてくれないかな。

「いいですよ。こいつがどうするか知りませんけど。」

アウロラはルビに触るうと手を伸ばしたのだが、猫は反対側の肩の方に移動してしまった。どうやら触らしてくれないらしい。何度も試してみたが触る事は出来なかった。

「気は済みましたか？済んだのならこの服に着替えてほしいのですが。」

その恰好で学園に行かせても面白いかも知れないが、制服が原則だからな。いや、いつのこと一日田なら私服で登校しても規則としては大丈夫ではないだろうか？道徳的に問題ありだが。でもあの学園は譲さん坊ちゃんが多いから大丈夫かもな。

「少し変わった服であるますね。」

「…………これから慣れていけばいいですよ。」

色々とね。

「俺は出でますから着替えたら呼んで下さい。」「俺は部屋から出でて合図を待つた。」

先程報告があつたがデータを見た限りでは完成に一か月は掛かるらしいな。逃げた奴らに先を越される前に何とかしておきたいのだが、こればかりはもうどうしようもない。こちらは頭脳派総出で戦闘部隊の人員も出来るだけ使っているからな。逃げた奴らは何やらバツクに大きな物があるらしいし。これからは外交政策も忙しくなっていく。金も必要だ……。資金源に大企業がいるとはいってもあれを動かすには会議で奴らを説得する必要がある。邪魔だが、かといって殺したら殺したで牽制し合っているこの状態では得策ではないだろう。……神の事も頭に入れなくてはな。

それにしてもかなり喜んでたな。頭脳派の連中。  
人類未踏の地にしてポストモダンの夢。はたまた将又科学者達の集大成とか何とか言つて騒がしかつたし。

「ふつ。」

彼は誰もいない廊下で微笑みを漏らした。

コンコン、とドアが一度叩かれ合図を受ける。

そして、彼は顔を引き締めてドアを開けた。

「……ちゃんと着ろよ。」

先が思いやられるな。

彼が彼女を教員室に連れて行った後彼は大きなため息をついた。

「では行つてくるが屋敷の事はちゃんと任せたぞ。光輝。」

「へい、行つてらっしゃい。」

「では、行きましょう。御姫様。」

「ミヤー。」

ルビがトコトコとついてこよつとしている。

「ふふつ、ルビ。君にも俺の留守を頼みたいんだ。分かるかい?。」

「ミヤー。」

分かつたか分かつてないのかは知らないがついて行くのを止めた。本当に良くてきた猫である。

そして、実のところ彼は余程忙しい時でない日にはここから通学一時間半程の所のバルトロム学園という所に通っているのだ。だが、年齢、名前、出身等を偽つており年齢は満たないが彼女と同じ高等部の一年生となっている。

そこの所は彼女ともしっかりと前もって打ち合わせしており、彼女はアウラという名でセビルア人として行動してもらうのだ。出身はともかくとしてこの学園では人種がポイントとなつてくる。

彼女が無知だという事は知つており、覚悟していたが彼の想像を超えるほどであったのだ。

疲れたな。まさかこれ程とはな。あいつを学園に連れてくるのは尚早過ぎたのか？だが、遅かれ早かれ外を知らねばならなかつたのだ。一週もすれば落ち着くだろう。

「どけよ！－ルソン人のくせに、自分達の立場をわきまえる。」「前の方で誰かが騒ぎ始めた。

ルソン人とはこのクライシスの有する国においては前に先住していした者達であり、クライシスという組織の者達の大体を占めるのがセビルア人という事から社会的に下の地位とされており、それは就職にも関わつてくる。

彼に取つては床に這いつぶばつている者も上から見下ろす者はもつとであるが、兎に角めざわりで仕方がない存在だった。

「何があつたんだい？レミ。」

近くに彼のクラスメートの女の子が立つて見ていたので話しかけた。レミは少し小柄で元気な女の子である。

「あ、お早う。エル。それがただぶつかつただけなの。」

彼の偽名はキエルで皆はエルと呼ぶ。

「そりなんだよな。もうこれだからこの学園のセビルア人は物騒だつて言われるんだよ。」

後ろからジャンと言ひょうひょうとして丸メガネを掛けた青年も顔を出してきた。

「そうか。」

つかつかとまだ収まる気配のない謔<sup>わざ</sup>の中心に歩んでいく。

「おー、止めとけって。」

「危ないよ。」

「大体てめえ等はなー。」

「おい！…こんな田立つところで騒<sup>さわ</sup>ぎを起こすのは止めてくれないかな。凄く迷惑なんだ。君はもう行つていいよ。」

慌てて覚束ない足取りでふらふらと周りの人より体を低くして駆けて行つた。

「お前何勝手に逃がしてんだよーー！」

「逃がしたわけじゃないよ。彼が居るべき場所に戻したのさ。」

挑発的に言葉を返す。

「IJの野郎……。」

ふふふふつ、今は少し気分が悪いんだ。ストレスは早めに無くしておかないとな。…君にも知つてもらつとしようか。この世がどういふものかを。

さあ、行くぞ。お前と俺とを接続、

「喧嘩なんて止めろ。どちらも痛み分けなんとしててもやIJに意味なんてないぞ。」

「お前は……ステラ。IJの偽善者め。」

「ああ、そうだね。でもだからどうしたんだよ。」

「つせえんだって言つてんだー！」

男の突然の不意打ちを簡単に交わすと足を掛けて転ばせた。

「止めた方が良いと言つてるんだよ。」

男はまだ悔しそうであつたが去つていった。

「ははっ、助かったよステラ。正直どうしようかと思つていたんだ。

「ふう、止めてくれなくても良かったのにな。

「うん、ありがとう。そう言つてくれると嬉しいよ。

少し浮かない顔で言ひ。

「何だ、ステラ。さつきのあいつの言葉を気にしてるのか？…搖らぐなよ。誰に何と言われても、人にどう評価されてもお前の行動に自分だけは良い事をしたと、間違つてなかつたと言つてやれよ。ちなみに俺は何時でもお前につけてるぜ。」

「ふつ、少しくさくない？そのセリフ。

そう言いながらも照れくさそうで又嬉しそうにも見える。

「こういう時にロマンチックなセリフを使わないと使う時なんて告白の時以外無くなるぞ。」

場が収まつたのでジャンとレミが傍に来ていた。

「レミ、告白はロマンチック何だつて。

ジャンが茶化して言つとレミの顔はほんのり赤くなつた。

「ど、どういう意味よ。べ、別に私は〜。」

「いや、告白はシンプルな方が案外いいかも知れない。…貴方がずっと好きでした。」

彼はノリのつもりでレミの手を掴み笑顔を振り撒き視線を合わせてそう言つた。

何も知らない周りから少しの黄色い声が上がる。

「どうだつた？ジャン。」

彼は振り向き様に問うた。

「百点満点〜。」

ジャンも持ち前のノリではしゃいでいるが、内心は不安で一杯であり、ステラは温かく見守るばかりである。

「固まつてどうしたんだい？」レミ。

彼が固まつたままのレミの肩に手を載せた。

すると、「ばかー！」と言いながら鞄を振り上げてきたのでそれを彼はかわすと鞄の描く円上にいたジャンに見事に当たりレミは走つていってしまった。

「何で俺だよ。痛いなー。」

「それにしても、今日は走つて行く人が多いな。」

彼のその眩きにステラは苦笑いを浮かべていた。

……この時は思つていたんだ。一生の親友つていうのはお前のことなんだと、そう信じて疑わなかつたよ。  
でも、それは違つたんだな。この時この瞬間も「」での思い出は、お前にとつては嘘でしかなかつたんだろ。お前にとつては俺なんてただ知つてるというだけの関係なんだろ。

俺はお前にこの時言われた言葉にどれだけ救われたか。  
お前という存在にどれだけ感謝したか…。

まさか、俺とお前は一生の親友でなくて一生涯の……敵だったなんて…。

まさか、俺に心のありかを示してくれたお前が、俺の心を否定するなんて…

俺達は出会わない方が良かつたのか？なあ、この時の様に教えてくれよ。何でも知ってるんだる。…キエル（クラウン）。

もう何よ。皆で私のことからかって。それにエルまで。いつもはみんなこと頼んでも言ってくれないのに。別に頼んだことないけど。そんなに面白いのかなー、私のリアクション。

…でも、恥ずかしかった。

まだ、思いだせるもん。手を取つて目を見て少し感覚を開けてそれで、

「さつきは悪かったね、レ!!。」

そういうこんな感じの男の子なのに少しハスキーな声で……。

「エル…！」

「はい。」

彼は少し驚いたようだが、何ともなかつたように返事を返す。

もう、いきなり出てこないでよね。それに周りで笑ってる子達がいて恥ずかしーよ。

「…くくく。」

「……何でエルまで笑ってるのかな……？」

「え……それは、あれだ……」

彼がレミの威圧により返答に困っているとタイミングよく予鈴がなつた。

ほつ、せつ言えば冗談はほどほどだったな。

「俺は席に戻るよ。」

「……ジャンに答えてもらうからもうこいよ。」

レミの隣の席はジャンだったりする。

この学園はクラスによって席が決められていたり、決められていなかつたり先生によつて違つたりしており、机は長机に4人ずつ座つている。移動の教室も多いので余り使わなかつたりもする。ちなみにステラは隣のクラスである。

ふふつ、ここはいいな。だが、ここは俺の居場所じゃない。楽しいが何か違う。ずれか。

彼は窓の外を眺めていた。  
いつも別段大して話をする訳では無いが隣の席の子が話しかけて來た。

「ねえねえ、キエル君昨日何してた?」

名前は…何だっけ?

「特に変わったことは何もしてませんよ。家にいました。」

「あれ、人違いかな? 昨日お城で見た気がしたのに。」

「いつ…いたのか? くそつ、あそこに来る人達全員にリサーチを掛

けどるべきだつたか。じゃああいつがここに来るのは少し不味くないか？…ばれる？どうする？あいつはこのクラスに来るんだぞ。

……『ぐく。

何焦つてゐるんだ。不審に思われるぞ。

「どうしたの？」

「いや、…お城とか聞こえたから少し呆気にとられてね。」

「ふふふつ、良いでしょ。でもね、予定なら今日までだつたんだけどね。中止になつたみたいなの。良く分からないんだけどね。」

間違いない。あの城だ。一応髪形位は変えさせたが…。

「ふーん、どんな『縁』があつたのですか？」

「『縁』？お父さんが招待されたんだよ。何でも仕事を一緒に緒していらっしゃくてね。」

「仕事？…裏の方だつたら面白いのだがな。でも、こいつは妙にお喋りだな。いや、人間などそんなものか。切つ掛けや口実を見つけてスムーズに2・3言交わせば次々と口について出るからな。

先生が教室に到着した。

起立と礼を彼が言つ。彼は少し休みがちだが、クラスリーダーでもある。（ジャンの推薦）

「特に言つとくことはねえけど、今日は新しい仲間が入るぞ。入つて来て。」

彼女が部屋に入つてから教壇の上に来るまで彼は窓のガラスに映つ

た隣の子の顔を覗いていた。

特に変わった様子もないけど、どう思つてているのだろうか？聞いてみるか？

「なかなかに奇麗な人ですね。歩き方にもどこか気品が感じられますし。」

「そうだね。それにしてどこかで見た気がするんだけど？」

「女優とかにいてもおかしくないです。」

「ふふっ、でもセビルアの人だから違うよね。」

この国の有名人は人数が少ないのである。

「親しみやすい顔、という所ですかね。」

本当に気づいていないといいのだが…。

挨拶を澄ませて歩いてきた彼女は彼の事を全く気にしない様子で通り過ぎた。

彼は自分が話しかけるまで他人になつていろいろと事前に言つてあるのでここは問題ない。

「それにしても凄い人気だなー。お前が来た時も結構盛り上がったけど、彼女ほどじやなかつたからなー。」

もう五时限が終わつたがまだ周りに人が付いている。

「俺の時はそんなに人もこなかつただろ。」

「あれはお前が話しかけにくかつたんだよ。俺も最初は窓の外をずっと見てるすかした奴だつて思つてたもん。」

うふうんとレミも頷く。

「でも、視線だけはかなり集めてたぜ。」

一日観察したが、やっぱり気付いてない様子だな。それもそつか。良く見てなければ少し遠くにいたので分かりづらいだらつ。田を凝らすなんてまねをするのは内の奴ら位だろうしな。

この日の時交わした言葉が巡り巡って彼の身に掛かってくるとは彼にも予想のつかないことだった。

## 今日の友は明日の敵？（後書き）

危なかつた。

何が危なかつたって油断してたら学園ラブコメにでもなりそうなのが危なかつたです。

それも彼女を使うのが楽しかったのもありますけど…。

何かいいですね。これが終わったら次に書いてみよつとか思つたり思わなかつたり…。

後、彼がいつ仕事してるの？とか疑問に思うかもですが彼は見てない所で頑張るタイプなんです。

では、締まりがないですが、また。

## レジスタンスの裏には？

彼はフェアが好きだ。

それ故に時折に敵に塩を送るのだ。

それは傲慢な事なのだろうか？

ウウーーウン…ウウーーウン…！

突如組織内の警報が鳴り、緊急の用事だと云ふ事が皆の緊張感を高める。

『ジョーカー様、各隊の隊長、副隊長の誰もは至急会議室にお集まりください。』

夜の皆が食事を終え身を休めていた所であつたので少しの怠惰感も高まつた。

会議室には残すところジョーカー一人となり、彼もそんなに経たず

に入ってきて直ぐに話し始めた。

「私は此処に来る前に要件を聞きましたが皆さんは？」「皆まだと言つ。」

「手短にいきます。ルソンの方々率いる抵抗勢力の人達が私達の所  
有する医療施設の周りで騒ぎを起こしており警備の人達では手が回  
らないそうです。そこで、H隊、C隊、D隊の三隊の人達は出撃し  
て下さい。」

光輝の隊はS隊スペードにあたる。

暴徒鎮圧に際して三隊派遣等今までにない事であるので皆は少し困  
惑気味になつた。

「三隊を使う事に意味はある。詳細は移動中に話す。ぐずぐずして  
いて逃げられては意味が無い。よつてこの会議は終了だ。」

一方的に話され一方的に終わらされるという傲慢な態度に怪訝な顔  
を見せるがそれでも行動に移るのは早く、会議室は瞬く間に静まり  
返つた。

車での移動中に彼は無線で話し始めた。

『今回の暴徒は今までの者達とは違ひ一応の武装を整えてきている  
そうだ。そこでこの者達の背後に僅かだが資金の元がある感じもあ  
る。だが、一番の理由は見せしめだ。レジスタンスの人には残念で  
すが、消えてもらいます。なお、そのさいに逃げ出す者が居れば一  
先ず左右と上は良く確認しながら追つて下さい。では、C隊は前か  
らD、H隊は左右から攻めて後ろは空けといつ下さい。恐らく貴方  
達の姿を見たら下がつてくれるでしょう。』

さあ、どう来るかな？暴徒の諸君。

そして、いつ抵抗は反乱に変わるのかな？

それとも、いつそ屈伏してくれると俺としてはありがたいのだがな。  
そうしてくれるとこちら側も待遇を出来るだけ考へてもいいものを  
…。

だが、どうせやるのなら最後までやりきつて欲しい気もするけどね。

数分後にアレク隊長から通信が入った。

『「」、敵隊は我々を見ると直ぐに全員左側に待機しているD隊の方に向かつた。』

『お前達は相手がお前達が常に追つてきていると分かる様な位置にいるなり、アピールをするなりしておき、D隊とC隊の中間点に向かう人も数人作って下さい。』  
『分かった。』

「……ふう。」

通信がきれるとアレク隊長は大きく一息ついた。

『隊長、あいつは、」は何考えてるんですかね？最近細かい指示が多くないですか？』

エディは隊長の顔色を見ながら言つ。  
隊長はエディの顔を一瞥した。

『……分からん。だが、結果があるからな。』

その現状では余り意見が出来ないのだ。

彼は直ぐにD隊と連絡を取つた。

『2分後程の俺の合図で前方のビルや建物を崩せ。やり方は問わない。』

『ハイ、分かりました。』

H隊にも連絡を入れる。

『少數班とそれの援護に分ける。少數班は先ほど話した後方の待機ポイントに急げ。残りの者はC班と連絡を取りつつ包囲網をせばめていけ。援護に向かう用意も怠るな。』

『了解しました。』

「では、6、7、9は先ほど話したポイントへ、気を付けろよ。後の者はC班との幅を詰めるのだ。」

三人は直ぐに動いて行つた。

「スタンリー隊長、三人で大丈夫でしょうか?」

隊員の一人が心配そうに言つた。

「……心配するな。我々にはあるお方が付いているのだぞ。従つていれば問題が出ても万事解決だ。」

H隊の隊長は少しを神聖視している所があるのであるのだ。

それというのも、彼はこの隊でも数少ないルソン人の隊員であり、この組織内は多くがセビルア人とは言つてもセビルア人は国籍がそういうだけで一時期解放的な事もあり他国籍な面があるので。ルソン人は髪質の特徴や赤茶けた肌色、澄んだブルーの瞳など目立つた特徴があるため見分けがつく。

当時既に組織内におり母国の民と戦いもして実績も上げたが、扱いは悪い上に周りから奇異の目でみられる事もしばしばだった。

そんな時に彼から声が掛かったのだ。

彼が来た後軍の人数も増えナンバーを「えられるのは厳しい」という状況の中で声が掛かつたのだ。

「君は人種を除けばそこそこの実績はあるようだから、空き番になつた6に入つてもらうよ。」

嬉しかつた。彼は歓喜したのだ。ここに来て一番の喜びかもしけない。彼も人間だ。独りで生きることに虚無感を感じていた。必要とされないという感情は苦痛を与えた。だが、認められたのだ。実績は確かにあるのだが、この狙いはマスコットの役割が大きかつたが、彼はそんな事は知らない。

そして、この後の言葉を聞いて一生仕える事を決めたのだった。

「分かるかい。君を、ルソンの人間を登用する事の意味が…。皆は困惑氣味だつたよ。まだ納得していない人もいる。だからヘマをしないでもらいたい。勿論信用はしている。だが、俺を切り捨てる用意も向こうにはあるんだ。

簡単に言おうか。お前が俺の申し出を受けるなら、言わば君と俺は運命を共にするということだ。お前の失敗は俺の失態として向こうは攻めるだろう今の感じだと恐らく切られる。そして、俺がここを止めさせられたらお前はどうなると思う。現状は今より悪くなるだろうね。

イエスかノーの一択でいいこう。シンプルなのが良い。出来れば比喩を使って答えるのは止めてもらいたい。

スタンリーは二つ返事でそれを承諾した。

「ははっ、お前はいつか後悔するね。俺についた不幸を、俺と出会つた運命を……。」

そうした経緯があつたりして今では隊長位である。

彼が隊長になる少し前辺りからの事だが、隊に特色が出始めたのだ。具体的にはH隊が潜入や追跡といったぐあいだ。そして今ではH隊は少し独立した部隊だつたりもする。

「くそつ、ヤバいぞ。後ろからずつと追つてきてやがる。」

レジスタンスの一人が時折後ろから聞こえる銃声に焦つて打ち返して言つた。

「ああ、分かつてゐる。でも、相手は慎重にきてるみたいだから大丈夫だと思つぞ。」

「でも、相手も大した事無いのかもね。私達みたいな武器持つて少し訓練積んだだけの相手にこの様じやしれてるかも。フランコは当たらないのに発砲しないでよ。」

一人の子が皮肉めいて言つ。

「まあ、それは言つてもな、ラト。相手は軍隊だぞ。」

「オルターさんは少し考え過ぎだつて、あんな奴らなんか……」

ドッゴーーン――

話しながら走つていると数十メートルは先であつたが、凄まじい音と供にビルが全壊し、残骸が直ぐ近くに降つてくる。

「ど…どうすんだよ。やべんじやねえか？これ？後ろからも来てるしオルターさん…！これじゃあ何処行つても…」

「く、えつと…。」

「左か右かどうするの。それとも後ろを突破する？」

全員の顔がオルターの方に向けられる。

「じゃあ……ひ

『右だ！…』

突然オルターが持っていた無線機から声が出る。が、誰もが焦りを感じていたこともあって皆がそれを彼の指示だとして、右に向かつて走りだす。

「オルターさん、後ろから敵が姿を見せました。」

「あ、ああそつか。」

そして、又オルターの無線から声がし出した。

『取り合えず質問に答えて下さい。そんなに疑問に思つても答えて問題はないことだと思います。貴方が皆を纏めていて指示の通せる人物なんですね？』

「…………ああ。」

さつきと違つて今度は小さな声量であり、オルターは疑問には思つたが無線の周波を知つている程の者なら大丈夫では？と思い正直に答える。

『今からアドバイスをしますが、聞きいれていただいても流してもらつても構いません。まず、このままだといずれ追い付かれて全滅します。』

思わず無線機を落としそうになつた。それというのも、少し前に頭の中に全員の死ぬ姿を想像しており、その光景が再び浮かんだからである。

『そこで、生存確率を上げるために一班に分けましょう。一般は軽い武器以外は捨てるかもう一方の班に渡して全力で前を駆けます。幸い敵は前にはいないので逃げられるでしょう。もう一方の班には貰つて強化した武装で後方に備える。』

彼はこれが囮を作る作戦だとわかり、苦い顔をする。

「だ…だが、それは。」

『無論これは犠牲が出る。だが、むざむざと死ぬ訳でもない。前方をいく人達は近くにあるであろう拠点についたら足に乗つて遠くに行つて下さい。そこも直に危なくなる。後方の者はその拠点まで下がつてきたらまだ勝機もあるかも知れません。武装もセビルアの奴らと変わらなくなるでしょう。では、生きていられたならまた。』

通信は途絶える。

オルターは顔を歪めて考え出す。この結論を手間取つてもいけないとこう焦りや、受けけてはいけないとこう考え、全滅という言葉の重圧、囮という作戦の重さ、どんどんと深みにはまつていったが、

「…オルターさん。やりましょう。」

近くで聞いていた者が言って、オルターの返事を待たずに彼は皆に聞いた事を指示として説明した。

皆悔しそうな言葉になつて、辛そうな表情になる。

それでも、数人の者が顔を見合わせると表情を力強いものに変えると囮を買って出た。

この作戦の一つの肝は囮となるものが居るかでもあり、無線を掛けた相手も直ぐには決まらないだろうと考えていた。この作戦は囮を早く作ればそれだけ生存率は上がるのである。

オルターも囮になろうとしたが、それはこの場では許されなかつた。

団の者一人には妻子を持つものがあり、首飾りを外して届けてくれとオルターの手に掲めた。

他の者もじっかりと挨拶を交わしていよいよ作戦は実行された。

『ノ、敵兵が前と後ろの一いつに別れたがどうする?』

『後方を見るだけでいい。お前達は前方を考えるな。後、誰でもいいから車を3台程回収しておけ。』

……忙しいな。それにしてもこんなにも決断が速いとはな。少し予想外だったぞ。

『H隊お前達は横にそれで後方の隊を追う形になれ。拠点らしき所に敵が入つたら知らせろ。』

『ハイ。』

ふふつ、ふふふふつ、彼は司令室で悪党笑いを浮かべて、右手の無線と左手の無線を上に投げたりして手遊びをしだした。

これで奴らにも生きるチャンスは与えた。後はチャンスを生かすも殺すもお前等しだいだ。

経験の少ない愚か者共が、経験豊富で武装も上のあいつらと戦つてどうなるか、……みものかな?

まあ、相手が何を基準として勝利と呼ぶかは分からんだけど…。もしも生き残る事がそれなら相手にも十分勝機はあるかもしれない

な。

でも相手は余り考え方をしないタイプらしいな。  
それにもかかわらず何のためにこんなことをしたんだ? .....調べさせるとか。

それはさておいて、負けでも勝ちでも生き残つてもらわないと少し  
困るのだがね。

レジスタンスの裏には？（後書き）

少し更新が滞ってしまいましたね。

さて、少し戦争っぽくなりましたがねえ。

これからを期待して欲しいです。自分的にはまだ序章ですか。

キャラ見せが終わってからが本編かな？

まだまだ一杯後続が控えています……以上で報告終わります。

## 自作自演と手駒

『「」、相手が少し大きな倉庫のような建物に入つて行きました。』  
やはり相手は馬鹿か。こいつ等のやつてるのは唯のゲームだ。不良と変わらん。否、武器を持つてる分達が悪いか。

……仕方がない奴等だな。

「見張りはどうだ？」

間髪いれずに返答がくる。

『「上に窓が二つあり、そこにそれぞれ二人と入口の前に一人、中に恐らく二人です。』

「大きめの車が入つているとしたら多めに考えてどれぐらいの数になりそうだ。」

『「……？ 多くて5台位ですかね。出てくるとしたら左側にあるシャツラーからになりそうですけど。』

「君らはそこに待機して、援護を呼んでくれ。その間に足を使って逃げようとしたら止めておけ。」  
そこで通信を切つた。

配置は三か所、総数はそんなにいないだろうに、見張りは7人。素人もいるかもだな。……それと中に民間人もいるかもしれないな。  
……よし、それで行こう。

「な、… なあ？」

隣に座つていてるエレナが声を掛けてきた。

「なんだ？」

「今… いつたい何処に向かつてるんだよ？」

今、彼と彼女は現在進行形で車を使い移動中であり、彼女が彼の指示で運転している状態だ。

「レジスタンスの所だ。否、正確にはレジスタンスが向かう所だ。後、面白いものも見れるぞ。」

彼は平然と言つてしまふが、彼女にはハンドル操作を誤りかける程に動搖が走つた。

「え… つと… どう、して？」

「… そうだな、お前には話しておくれか。全てではないが、まあ大体は。」

そしてアレクに通信を入れた。

『隊長、… 後方の人達はもういりません。… 消して下さい。』

『… ああ。まかせておけ。』  
次だな。

『援護の者はまだか？… そうか、では合流と同時に中に入れ。恐らく中に数十の民間人がいる。抵抗するものは打ち殺せ。だが、なるべく捕まえろ。隅にでも固めておいておけ。では頼んだぞ。』

ふう、疲れるな。でも次で最後だ。

「レジスタンスの方々、先の者だ。先ほどは僅かでも信頼の程、どうも有難う。」

『… 君か。今、僕らはこれから君の言つようじで移動する所だ。』

「ああ、そうでしたか。その件について今良い事、否悪い事ですか。分かりましたので。此処はもう一つ信用して話しを聞いてもらえないでしようか？」

向こうの方がざわついているのが、通信機越しでも十分に伝わってきた。

そして音が止む。

『一応聞くだけなら聞いてみよう。それでも良いかい。』

「ええ、構いません。それにしても向こうも中々やるみたいでしてね。どうやらそこの外で待ちかまえていらっしゃるのですよ。今出て行けば全員捕まります。」

向こうがまた騒がしくなる。

『くつそー、やっぱり罠だつたんだよ！』『俺は最初から怪しいと思ってたんだよ。』『お前等がいらん事するから俺達まで巻き込まれたんだぞ。』『あんなやつの事聞くんじやなかつた』やはり関係の無い人もいたのか。それも賛成でない者。否、そういうやないかこういう奴は成功すれば喜び失敗すれば避難する、一般的模倣のような態度だな。これで俺の考えは台無しか。言づ手順を間違つたか？そんなこともないか。どのみちこれは言わなければならないことだったのだ。聞けば騒いだらうからな。電話が難しつてのが良く分かつたよ。

『…これから、俺はどうしたらいいんだ。』  
とても弱い声で聞いた。

自分で考えると言いたい所だがそれでは駄作しか思い浮かばんだろう。ふ、任せておけ。

「この作戦、又私に対する賛成、反対は大いに結構。しかし、現状は従つておくのが吉では？そして、この作戦には人数制限があるので生き残りたい者だけを募つて下さい。時間がないので一分後に連

絡しますのでその時までに。』

「待機つて言われてもやつぱり暇だね。」

敵を追つてきたのはいいもののその後は手持ち無沙汰になつていた。  
「黙つてみはつとけよ。敵が出て来たらどうすんだ。レイを見習つ  
てみる。ちょっと見習え。」

ずっと人形の様に固まつている完璧な態度にこじまでしなくていい  
いと思い言い直した。そして、本人は意識していないが、暇を感じ  
ていたのだろう。黙つていろとは言つたが、いつもより饒舌になつ  
ているのだ。

「もうフランプは固いのよ。それにしてもっは本当に人使い荒過ぎ。」

「何だ。お前は反対派なのか?」

数年経つた今でも彼を悪く思う者もまだ残つているのだ。

「べつにー、私はこの隊好きだしね。基本的に餓鬼は嫌いだけど。  
彼はそんな感じじゃないし。」

(お前自分の事分かつていってんのか?それとも同族嫌悪とか?)

ドッバー——ン

「何だ!—」

彼らが会話に興じていると突然、倉庫の壁を突き破つてトラックが  
飛び出した。

ドシユツ、

だが、レイは冷静にタイヤの片側を一輪打ち抜き転倒して止まった。  
「今ので居場所がしれたかもしない、移動するぞ。」  
流石と言つべきか判断も早いが直ぐに切り替えが出来るのも素人の相違か。三人はすぐさま離れた。すると、数秒後に元居た場所で爆発が起きた。

「危なかつた。あ、車がまた出たよ。」

十数秒後にして来た車の運転主を三人で射殺する。ハンドルを切らない車は壁にぶつかって変形して止まる。

「今度は逃がさんぞ。」

三人の左から銃弾が飛んでくる。咄嗟に横に逃げたがそれでも全部は交わしきれず、一番左の位置にいたフラップは四肢に受けた。幸い右手と左足は動かせたので壁の死角に入った。

そこからは暫くの間敵との睨み合いが続いたがそれにも時間が来た。

『雷汞設置したぞ。』

良し、中々の手際だな。それにしても、良くそんなものがあつたな。まあ、驚きはしないが…。

「では、3人を残して退去だ。三人は徐所に下がり、相手の増援部隊が来たら地下に潜り西に進め。分からなければ水か風の流れくる方だ。煙でも出せば分かるだろ。」

三人を残して他の者は変形した車を拾つて去つて行つた。

「……よしーー!トネーション。」

彼の合図で爆発が起きた。

ふう、どうなったかな。』ちらから聞くのはおかしいから連絡を待つしか無いのだが…、

『報告があります。』

来たか。

『何だ。』

『レジスタンスと抗争があり、隊員二名が重傷を負いました。又、レジスタンスを一部逃がしましたが、大 majority を確保しました。』

『どういうことだ。爆発の規模がそこまで広くなかったということか? ちょうど二つ、三つの駆けつけてくる頃合いだった筈だが… 現場を見ないことは何とも言えないな。下手な聞き方をする訳にもいかんし。

『車を二台手配させている。それに乗ってくれ。』

『分かりました。』

『三名…か。もつと重傷者が出ると思つてたが、ふう、中々得てして万事がうまく行くものではないな。』

エレナとつはレジスタンスと交戦していた場所から車で20分程の所でまだ車を走らせている。

窓の外の光景は大分変つて来ていた。

「面白い光景だろう。いろんな事を考えさせられる。」

一言で表すなら、スラムである。兎に角荒れていた。そして、ここの一帯にすむ人の全てがルソン人という訳でもないのだ。この町は社会の不成功者で構成されている。この国はかなり国境が緩くなっているので簡単に入つてくる。そして、金を稼ごうと都市部へ行き、そこで長時間労働低賃金を強いられ、潰れた先はこの町だ。この町の人数は今も増え続けているのだ。

ふと、横にいるエレナに視線をやると、少しほんやりとしていた。

「ふ、懐かしさでも感じているのか？お前の親と逃げていた頃にこういう風景を何度も見ていただろうからな。」

世界を探せばこんな町、ここより酷い町等数多くあるだろ？ふふふ、こいつ等ははっぱを掛けても碌に動きはしないからな。……だから決めた、上をえると……ふう、少し考え過ぎたな。  
これからまだ一仕事あるんだから、冷静にならなきやな。

「お前はここで待つていろ。」

一人はあれからさらに20分程車を走らせ、港に来ていた。  
もう一度連絡を取り、今度は落ち合ひ約束をしたのだ。

そして、フード付きのロングコートを着てフードを曰いつぱい被つて、倉庫の中に入つて行つた。

中では既に皆がきていた。少し遠回りをしてきたのでおかしくはない。

まず、彼が中に入ると頭蓋に銃口を当てられた。

「何者だ。」

威勢の良さそうな女性が言つた。

「ここ」の様な場所に明確な目的も無しに来る人等滅多にいないと思うのですが？」

彼は銃口を当てられても至つて冷静である。

「じゃあ、君なのか？俺たちに指示を出したのは。」

「ああ、私だ。」

ここでの場にいたレジスタンス9名はざわついた。

この中の者は彼の事を大概信用はしているが、批判の氣で一杯であった。

それもそうだ。作戦に犠牲は付きものだが、彼の場合は犠牲のある

作戦を一度も使ったからである。

だが、声事態は上がらない。上げれない。彼の作戦に乗つたのは紛れもなく「こころいる者全員だからである。

「質問してもいいかな？」

「どうぞ？」

リーダーのオルターがそう言ひと顔の眼が彼へと注がれ、銃口が外れた。

「君は一体どこのだれなのかな？」

最もな質問ではあるが、顔を隠して入ってきたものにこの質問も少しナンセンスである。

「少なくとも生まれも育ちもこの辺りではない。しかし、この国に怒りを感じているのは私も同じだ。時に問うが、君達は何故今回この様な為にならないことをしたのだ。」

「それは、……」

「俺達に資金をくれてた奴に言われたんだよーー！」  
隣で少し激昂氣味にフランコが言った。

「君達は真意が分かつていて且今回の件に望んだのか？」

「ああ、……切られたんだろ。」

「ええ、そうだったのかーー！あいつ等ー。」

フランコの怒りは上がった様だ。

成る程な。それで不良品な爆弾のわけか。それにしても、バックが消えた後だったか。新たに作るしか無いな。

「行動の理由は分かつたが質問の答えとしては不十分だな。何故、この様な事をした。」

誰も答えない。

そして彼は中央へと歩んで行く。

「気付いていないのか？貴方達のやつてこむことは悪戯に過ぎないところことがある。」

「何が言いたいのよ！！」

銃をつきつけたラトが叫んだ。

「貴方達が今そのまま幾等行動を起しそうと国は潰れない。変わる事はない。痛くも痒くもないからな。どうせ行動を起こすのならもうと大それたことをなせ、偉業をなせ、歴史に刻め。貴様らのやるべきことは暴動ではない。ましてや抵抗活動でも無い。国を潰すことだ。」

彼の物言いに一瞬たじろいだ。いや、恐怖や感嘆の様な形容しがたい圧迫感に気をされたのだ。

馬鹿にしようと笑い声を出そうとしたが、乾いた声しか出てこない。

「はっ、はっ、なんことできるわけねえだろーー！」

「口だけならなんとでも言えるわね。」

「そうだ、何とでも言える。では、何故言わない。それはもうお前達の中で諦めを感じているからだ。何故諦める？まだ貴方達は何もしていないだろ？。そして、俺もまだ何もなせてはいない。そこで貴方達の力を借りたい。手始めに貴方達の仲間を助けるために。」

この国が変わり始めた。

## 自作自演と手駒（後書き）

ひつぢびとの更新やー。

これからは最低でも一週更新位にはしておこうと思います。

でも、大変です。一度書きだすと5000字位あ、なんすけどな。

なんて思つたり、思わなかつたり、では、又。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6746d/>

---

俺の哀れで滑稽な楽しい日々

2010年10月23日14時13分発行